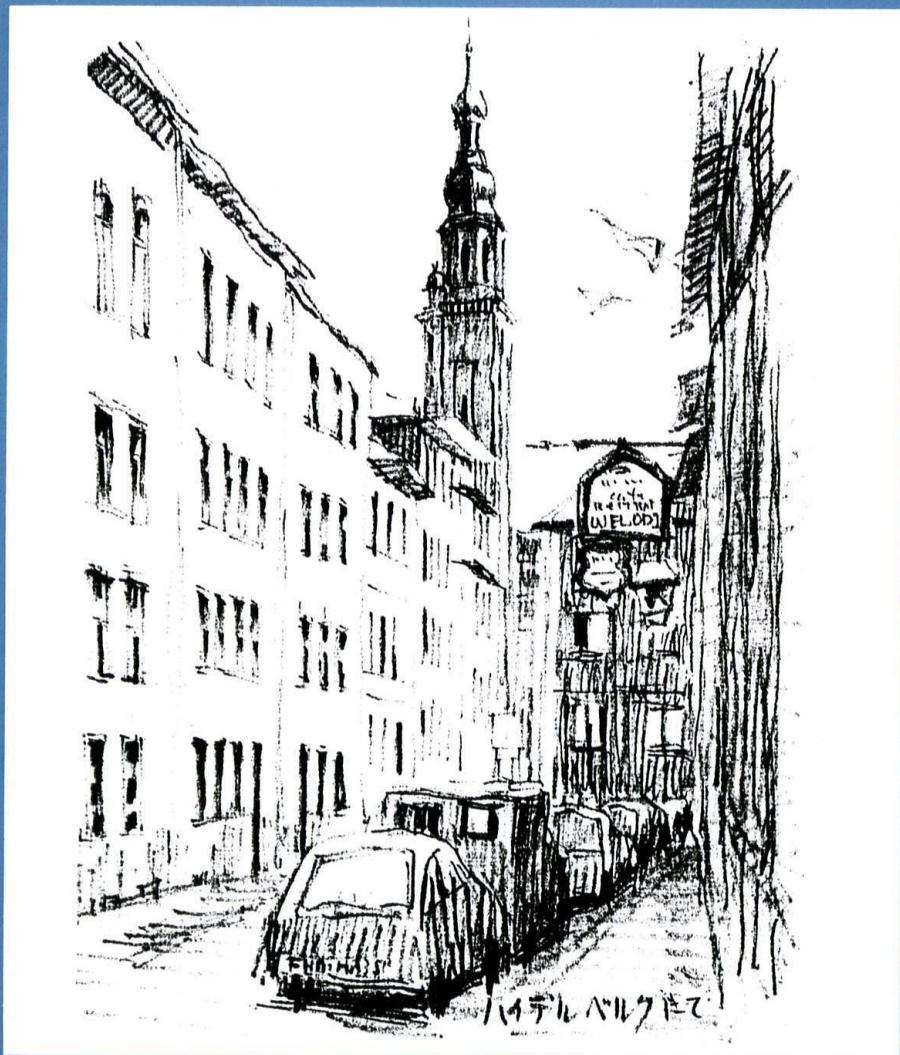


やまざき文化

'96-2 * No.15

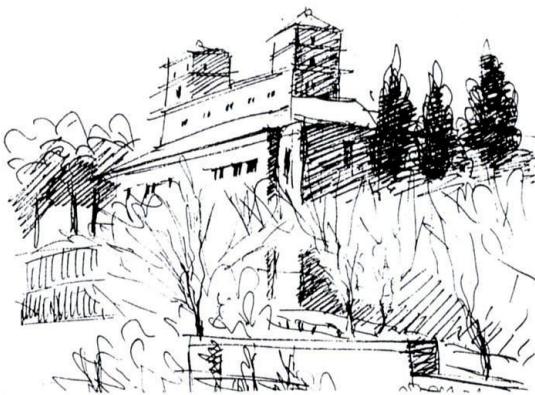


山崎町文化協会

“情報過多の時代”

山崎町文化協会会長 壱阪壽

壽



現代社会は情報が極めて多い時代であります。そして情報の伝達手段も新聞、テレビ、ラジオといったものから、最近ではインターネットを使って情報が世界中を駆け巡っています。私等はいうなれば情報の大洪水の中に居るようなものです。その上映像を通じて色々な出来事がまるで手に取るように伝わってまいります。

先年勃発した湾岸戦争にしても、あの近代兵器を使った激しい戦争が映像を通じて刻々と伝わってきますし、阪神・淡路大震災の場合もそうでありました。

このようない情の多い時代に地域文化を創ってゆくことはなかなか難しいことで、ともすれば多くの情報に「自己」を見失いがちになり、その情報の中に埋没してしまって、そこには地域としての文化の主張も、そして輝きまでも失ってしまったものになってしまいます。

やはりそれぞれの地域にはそこに住んでいる人々或いは自然環境から醸し出された地域文化を創り出してゆくべきだと思いまます。

そのような観点から“やまさき文化”が多くの方の御協力を頂き乍ら山崎の地域文化の発展に貢献するよう念願いたします。

◇ 目 次 ◇

“情報過多の時代”

桃顔露にほころび

歌

短歌

和田疎人さんを悼む
ウソと科学の眼
新しい眼科の手術と山崎町
スクイム市民との交流について

福岡久藏
昭夫

福田耕三
幸子

田中良子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

福岡久藏

昭夫

藤井慧乘

堀口春夫

長田一三

田中昭夫

福田彰

泊水

田中耕三

幸子

稻村

浅田

中嶋

桃顔露にほころび

山崎文学会 浅田耕三

五月末の日曜日、麓の杉ヶ瀬までは一二五ccの単車に二人乗りし、登り口に乗り棄てて、そこからつづら折りの小径を二人は登り始めた。

「母柄は、平家の落人の村と言われている」

大賀は、ゆっくり歩きながら、早速川辺に村の伝説を話し始めた。大賀の足は山歩きになれているが速度は遅い。疲れぬためだ。

「山葵やまいを取りに行こうか」

大賀が言った。

昭和四一年の初夏——。

「わさびって野生の？」

「そらそうや。栽培のわさびはこのへんにはあらへん」

「へえー、野生のわさびが取れるの、そいつはいいね」

川辺謙助が目を輝かした。彼は一年前に、神奈川の逗子市から越してきた。町の誘致した通信機器メーカーの技師で、大賀の家のすぐ東の空家を借りて奥さんと子供の三人で入っている。

この土地は初めての川辺は喜んで大賀の誘いに応じている。

「で、そのわさびはどこにあるの」

「ちよっと遠出をすればいろんな所にあるんやが、そうやなあ、今年は母柄に上がつてみようか」

「もす？」

「うん、わさびもやが、標高五三〇メートルの秘境を君に見せたい思てな。案内するワ」

「どうして登る」

「もちろん歩いてや。村には由緒があつてな。そいつは登りながら説明する」

大賀は中学校の社会科の教師だが『平家物語』は好きで、学生の頃からの座右の一冊である。

「ふん、すると四国の祖谷や九州の椎葉村と同じだね」

「あんなに有名ではないけどね。落人村といわれるものは西日本の各地にかなりあって、この母柄もその一つや。言い伝えによると、富士の局つぼという平維盛の妻が、家来や侍女達に守られてこの地に落ちてきて、人里離れた母柄の山中に隠れ栖みついた——」

「何か記録もあるの？」

「いや、そんなものはないらしい。すべて口承や。しかし明治の中頃に火事で焼けるまでは、村の土蔵に胄や鎧、刀や槍がたくさんあったそうやし、江戸時代には家が一五、六戸程もあったらしい。今残っているのは五戸やけどね」

「平維盛」というと、たしか重盛の子？」

「そう。邸が京都の小松にあった所から父の重盛以来『小松殿』と呼ばれ、重盛は早世するが、子供は男が七人あって、維盛はその嫡男や。なにしろ宗家の跡取りやからな、平家一門の期待を担い、源頼朝や木曾義仲の討伐に向かうけれど、武将としての維盛はどうもなあ——」

「あんまりばっとしたしなかった——」

「うん。まず富士川合戦で大失敗をやらかす」

「水鳥の羽音に驚いて逃げたというあれ？ あれはほんとの話なのかねえ」

「そらほんとやろ。『平家物語』によると、治承四年（一一八〇）九月一〇日に総大將維盛は、三万の軍勢をひきいて京を出立している。平家重代の唐皮からという見事な鎧を唐櫃に入れて雑色ざいろにかつがせ、道中では赤地錦の直垂ただたれに萌黄緹もえりの鎧を着て連錢葦毛の馬にまたがり、とまあ、絵筆も及ばぬ程の武者振りで威風堂々進軍する」

• 3 •

——容儀体挙、絵にかくとも筆も及びがたし——

と『平家』の作者は記述しているが、若冠二三歳容姿ふるまいのすばらしい白皙の貴公子だったのであろう。副将は祖父清盛の弟、つまり大叔父にあたる薩摩守忠度、先陣は上総守忠清、しかしこの忠清と維盛が反が合わない。

駿河国清見ヶ関に着いた時は、あちこちから馳せ集まつて平家の軍勢は七万余にふくれ上がつていた。維盛は忠清を召して、足柄を越えて坂東へ打つて出ようという。が、忠清は、自分は福原（神戸市）を出発する時、入道清盛公から、いくさはお前にまかせるといわれている。富士川で駿河、伊豆の味方が到着するのを待つて決戦をいどむつもりだとつぱねられ、維盛は「力及ばずゆらへ」てしまう。「ゆらふ」といふのは、ひかる、ためらう、の意味だからこれではどっちが総大将だかわからない。

その上忠清は、進軍の途中、源氏の佐竹太郎の雑色が主人の手紙を持って京に上るのをとらえ、頼朝の軍勢の数は、ときく。雑色は、頼朝勢は二十万騎、野も山も河も兵で埋まっているとこたえる。

また維盛の方も、かつて源氏で今は平氏に属している斎藤別当実盛に、源氏の兵は強いか、とたずねる。と実盛は、どういうつもりか、ここぞとばかり関東武士の強さを強調し、——親もうたれよ子もうたれよ。死ぬれば（その屍を）のりこえのりこえたかふ候。西国武士は親討たれぬれば孝養し、忌あけて寄せ、子うたれぬればその思ひ歎きに寄せ候はず——。

とこたえている。「孝養」とは供養、「忌あけて」は忌中の期間が過ぎてから、といふことだ。こんな話をきいていたから、たたかう前から平家は大将も兵も源氏におびえていたのだろう。

かくて治承四年一〇月一三日夜半、何に驚いたのか富士川の水辺にいた数千の水鳥が一斉に飛び立つたのを平家は敵の襲撃と勘違いし、あわてふためいて逃げてしまう。富士川の瀬々の岩越す水よりも

はやくも落つる伊勢平氏かな

東海道宿々の遊女にまで平家はそんな歌で嗤われる。

忠清は富士川に鎧もすてて逃げた。

「清盛は？」

「残念ながら前々年の養和元年（一一八一）の閏一月に「あつち死」（悶え死）をしてしまった。頼朝の首をわが墓前に供えよと遺言してね。あと、平家のリーダーは清盛次男の宗盛やが、この人物がまたやさしいというか、めでたいというか、決然とした所が少しもない。どうも平家には実力主義という発想はないようやなあ」

「血統、家柄で決めてる？」

富士川に鎧は捨てつ墨染めの

衣ただきよ後の世のため

鎧など捨てて墨染の衣が似合うよ、の「只着よ」と「忠清」を掛ける。これも遊女の作だ。

福原へ帰り着くと清盛は激怒して

——大將軍權亮少將維盛をば鬼界が島へ流すべし。上総守忠清をば死罪におこなへ——

とどなりつける。『玉葉』という書物には一月五日近江の瀬田まで帰り着いた維盛に清盛の使いが待つていて、清盛の言葉をこう伝えたとある。

——誰人カ目ヲ合ハスベキヤ。不覺ノ恥家ニノコシ、尾籠ノ名世ニ留ムルカ。早ク

路ヨリ跡ヲクラマスベシ。更ニ入京スペカラズ——

「ところがその維盛が翌年六月には右近衛の中将に出世している」

「どうして？」

「他の公達とのバランスやろな。叔父の重衡も左近衛の中将になる」

うしろを歩きながら大賀がいった。山道は次第に急になる。陽ざしは強いが風が乾いていて快い。

「そして北陸の俱梨迦羅が谷でまた敗けるんだろう」

「うん、富士川から二年後の寿永二年（一一八三）四月、またまた小松三位中将維盛は、平通盛と共に大將軍として十万余騎をしたがえ、北国の木曾義仲討伐にむかう。どう考へても維盛は武将の器でないと思うけどやっぱり平家の嫡流やから仕方ないのかなあ」

「船山の神輿に弓を射た程の合理主義、現実主義者の清盛がもし生きていたら、総大將の宗盛もやが、二度と維盛を大将軍には任命せなんだと思うけどね」

「あんただつたらどうする」

「総大將は平知盛か教経やな。そしたらくりからが谷も、勝利とはいからくてもあんな惨敗はしなかつたろうと思うがね」

「平家には戦略家がいなかつたんだろうねえ」

「うん、維盛通盛に率いられた平家は、案の定木曾の山中で義仲の計略にまんまとひつかかる」

くりから峠で敵味方三町（約三三〇メートル）を隔てて対峙すると、木曾勢から一五騎の精兵が出てきてやおら一五本の鏑矢を、平氏の陣に放った。鏑矢はひょうひようとはでな音がする。

源氏が弓勢を自慢していると思った平家は負けじと一五騎を出して射返す。木曾は

さらに三〇騎、平氏も負けずに三〇騎、五〇、一〇〇と競い合ううち、いつしか夕闇が迫っていて、ふと平家が気がつくと、木曾の搦手の兵一万騎が背後に回っていた。それが腹をたたき、どっと悶の声をあげた。さらに側面のぐみの木林にひそんでいた別の一万と、今井四郎の六千もわっと周囲から喊声をあげた。

あたりは暗し、まわりを包囲されたと思った平家は、またまた周章狼狽、われ先にとくりからが谷へと馬でかけおりる。

—— 親おとせば子もおとし、兄おとせば弟もつづく。主おとせば家の子郎等おとしけり。馬には人、ひとには馬、落ちかさなり落ちかさなり、さばかり深き谷一つを平家の勢七万余騎でぞうめたりける。巖泉血を流し死骸丘をなせり

と『平家』は記す。このち篠原合戦で平家は再び敗れ、斎藤別当実盛も討死、かくて北陸のいくさに大勝した義仲が一気に都へ攻め上る、ときいた平氏は、とるものもありあえず急いで都を落ちる。

安徳天皇おんとし六歳、おん母建礼門院も同じ輿にのり給い、三種の神器をたずさえ、たくさんの侍女、武士に守られて京をあとにする。まさに諸行無常、盛者必衰

「維盛という人は武将というより、やはり公卿やな。尤も、平家の公達のそんな公卿

氣質は維盛だけやない。琵琶の名手の平経正も熊谷直実に討たれたる笛の敦盛も、千載うちに骨のズイまで公卿になってしまったのかな。清盛程の人物が一族のそんな様子を手を抜いて見ていたというのが解せんけどね。これも歴史の謎かな。しかしそこへ行くと頼朝というのはやっぱりちがうねえ。弟の義経が院の御所でほめそやされ、後白河法皇にいよいよ丸めこまれるのを横目でにらみながら自分は決して京に近づかん。鎌倉にいながら後白河法皇という怪物の正体をちゃんと見抜いている。ま、そんなん余談はさておくとして、本題の維盛や。都を落ちるに際して京の小松の邸にのこす妻子に別れを告げに行く」

北の方は故中御門新大納言成親卿の娘。
—— 桃顔露にはころび紅粉眼に媚をなし、柳髪風に乱るるよそほひ、又人あるべしとも見え給はず——

と、『平家』はその美しさを形容している。これ程の美人は他にいない、というのだ。一人は人形のよう似合いの夫婦だったのだろう。

門に馬をつなぎ鎧具足のまま維盛は北の方にいう。

「私がどこかで討たれたときいても決して尼になろうなどと思わないで下さい。私が亡くなれば、あなたを妻にほしいと名のりを上げる人がきっとあるでしょう。どうか

その人達の中から最もすぐれた人を選んで添い、子供たちを育ててほしい」

北の方はそれにはこたえず物をすっぽりかぶって泣き伏していたが、いよいよ維盛が出ていこうとすると、その袖にすがり、「死ぬ時は同じ野原の露とも消え、一つ底の水屑ともなる」とかねて夜の寝覚めの睦言にお約束したことがありましたがあれはみな偽りだったのですか。私一人なら捨てられても仕方ないと諦め、この身一つはいかようにも処置しますが、幼い子供達をどうしろとおっしゃるのです」と恨む。

「ほんにあなたは一三、私は一五で夫婦になり、死の果てまでも共にと誓ったが、世の中がこんな事になってしまい、もしあなたをいくさ場につれ出せばどんな憂き目を

見せるだらうと思つて京にのこすこととしたのです。今後もしどこか西国の方にでも落ち着くことができたならきっとと迎えをよこしましよう」

立とうとすると一〇歳の若君、八歳の姫君が走り出てきて父の鎧の草ざりにとりつき、私達もいっしょに連れていってよと慕い泣く。と、門の外で待っていた維盛の弟の資盛や清経、有盛達がいつまでも出てこぬ兄にしひれを切らし、門の中に入ってきた

「帝はすでに西の方遠くまで落ちておられましよう。みあとを追つてわれらもすぐ行かねばならんのに兄上は何をぐずぐずしておられるのです」とせきたてる。

今は仕方なく維盛は馬に乗るが諂めきれずまたひき返し、弓で御簾をかき上げ、「これ見よ弟たち幼い者がこうして慕つているのに、そう邪険に振り切つて行けるものか」と弟達も思わず涙で袖を濡らす。

道は急に平坦になつた。

左側の赤松の疎林を通して眼下に展望がひろがる。国道二九号線に添つて蛇行する揖保川が銀色に輝いている。上流は伊和神社の社の裏手のあたりまで手に取るように見渡せ、西安積の方の山々が白くかすんでいた。

「休んでいこうか」

初夏の陽射しを避けて二人は松の木蔭に入った。かすかな松籟に遠近の五月蝉の声がまじる。

「一の谷の合戦ではもう大将じゃないのだろう、維盛は」

「病氣で合戦には出ず、終わつてから弟達と船で高砂から屋島へ渡つてゐるね。一の谷では兄弟中で末弟の師盛だけが戦死しているが、高砂のどこかの浦に兄弟で隠れていたのかも知れん。だから母栖伝説の、富士の局という人物がほんといて、満友といふ家来達とここまで逃げてきたとすれば、この一の谷の合戦のあと、屋島へ行く夫と別れたのかもしけん」

「足手まといの妻子と別れて、いよいよたかう覚悟を決めたのかねえ」

「いや、そうやないのや。維盛はやっぱり妻子への執着、この世への未練が断ち切れん。戦意の全くない彼は、総大将の、さきの右大臣宗盛や二位の局（清盛夫人）達に、

ひょっとしたら源氏に降伏した池大納言頼盛と同じく、平家を裏切るのじゃないかと疑われる。それで、『あるにかひなきわが身かな』（生きても仕方のない自分だなあ）と嘆いてね』

「味方に疑われるのか。やり切れんね』

「そう。それでなれば死を覚悟した。そしてどうせ死ぬのなら、せめて京に残した妻子に一日会おうと思い、屋島を脱け出し、徳島へ出る』

「船だらうね』

「うん、船だね。が、さて母栖伝説では維盛は徳島県の山中に入り、その場所を「父栖」といったという。実際その父栖という土地が徳島にはあるらしい。ところが『平家』では、維盛は寿永三年三月一五日の晩、石童丸という子供と他に二人の家来をつけ、阿波の結城の浦から小舟で紀伊水道をわたり紀の川の河口へ上陸している。

そこから山伝いに京へ入ろうとしたらしい』

「白面の貴公子も西国を放浪するうち、だんだん逞しくなつたというわけだ』

「そうや、妻子に会いたいという一心や』

大賀は立上がりつた。

「さあ、そろそろ行くか』

平坦な道を一人は下から吹き上げる風を背に歩いた。話はあわれだが七八〇年後の五月の空は快晴である。

維盛は京へ戻ろうとするが、一の谷で源氏に捕らえられた叔父の重衡が、都大路をひき回され、やがて鎌倉まで曳いていかれたと噂にきいていた。

もし自分も捕まつてそういう事にでもなれば、早世した父重盛の屍を恥の血で汚すことになる、と京へ入るのは諦めてしまう。かといって他に行くあてもない。いつそここで出家しようと思つて、高野山へ登つていく。

「滝口入道と横笛の話、知つてゐるやろ』

大賀が訊ねた。

「ああ、詳しうはしらんが、学生時代に舞台劇でみた事あるな』

「へええ、そいつは大したもんや。そんなら高山櫻牛の『滝口入道』やな。どこで

「大学の文化祭で演劇部がやった公演でね」

「なるほど。昔、父重盛の家来で滝口の武士だった斎藤時頼が建礼門院に仕える雑仕の横笛という美しい女性を好きになり、結婚しようとするが、身分のちがいを理由に父に反対される。時頼は、好きな女性とも一緒にになれぬ世をはかなみ、高野山へ登つて出家してしまう。このあたりはあまりに小説的で、『平家』の作者のフィクションかもしだれぬけれど、維盛は昔なじみのこの時頼、滝口入道と高野山で再会する」

「横笛は出家した滝口が忘れられず、京からはるばる会いに行くが、今会ったならば折角の自分の決心が鈍るからと滝口は戸も開けず横笛を追い返してしまった。ドラマはそんな内容だったね」

「よく憶えているね。その滝口に維盛は高野山を案内され、弘法大師の廟にも参詣する。醍醐天皇の御代、延喜二年（九二二）、醍醐帝の夢枕に現れ給うた弘法大師のねがいをきき入れ、帝は勅使中納言資澄を高野山にお遣わしになる。資澄は般若寺の僧觀賢を伴い、大師の御廟に入る。大師は人も知るよう上中入定なさった即身仏や。死後約一〇〇年たっていたがお姿はそのまま、しかし髪だけが長く伸びていた。帝の仰せにしたがい、資澄と觀賢上人は、桧皮色の衣を大師に着せ奉り、髪を剃ってさしあげ廟を出した。多分その話を維盛は滝口から聞くのだろう。『平家』には書いていないが、それがいっそう、維盛に出来願望を起こさせたのだ、とぼくは思う。維盛は山上で滝口入道と石童丸に髪を剃らせ、石童丸もこの時元結を切って出家する。そして熊野に参詣し間もなく那智の沖合に小舟で出ていった維盛は、石童丸と共に入水自殺してしまう。時に寿永三年三月八日。維盛二七歳――」

「では母栖のことは――」

「残念ながら『平家』や『源平盛衰記』にはないね。しかし、だからといって母栖伝説が事実でないとは限らない。『平家』の方がフィクションかも知れん」

「なるほど」

「まあそれはそれとして、『平家』では、維盛はただいちずに妻子に会いたいとねがい北の方や子供たちも維盛をしたう。たとえば一の谷の合戦の五日後の寿永二年一月一二日、一の谷で討たれた平忠度や敦盛達平家の公達の首が都へ帰され、都大路の

東洞院から北へひき回される。「首渡」の場面だが、生捕られた三位中将重衡、首と共に生身をひき回されると噂に聞いた北の方、京の大覺寺の谷の奥に源氏の目をのがれて子供たちとひそり暮らしていたが、同じ三位中将という官位の名称から、生捕られたのは夫の維盛ではないかと気が気がでなく、家来の斎藤五、六の兄弟を見にやらせる。

兄弟はひき回しの都大路で人の蔭からこっそり見物し帰ってきて、生捕られているのは維盛でなく重衡だったと北の方につげるが、それならもしや夫は首の中にあったのではないかと身をもんで嘆きかなしむ。

次から次と悪い方へ悪い方へ心配を重ね、ひたすら夫の身を案ずる妻の姿がよく出ていて『平家』の中でもぼくの好きな所やけど、男離女離のように美しい二人は愛情も細やかな夫婦だったのだろうね」

「首はどうにしてひき回すのです」

「絵巻物によれば、なぎなたの柄にぶらさげているね。はじめ後白河院はじめ側近たちは公卿の身分でしかも天皇の外戚だった者の首をひき回すのは先例がない、といつて反対するんだが、範頼、義經兄弟が強硬にひき回しを奏上したので、後白河法皇は仕方なく許してしまった」

雑木林を抜けた所で再び休憩。伊和神社の杜の薄墨色が、さつきよりもぼやけて春がすみの中にうかんでいる。

長い坂道も休み休み登るとさほど苦痛も覚えない。樅の大木の下を左へ折れ、一〇〇メートル程歩くと急に視界がひらけ、二人の前に棚田と、その上の山麓に家が現れた。

一人は沢のほうへゆるやかな勾配を下りた。沢の一番低い所に小さな谷川が流れている。

「川辺くん」

大賀は立停まって田の石垣を指さした。石垣の石には淡黄色の模様がうき出している。

「石苔^{イシカケ}というのやろか、古い石によく見かける模様や」

と、突然、家の方から犬の吠え声がひびいた。一匹の声に別のが応じ、三匹が吠える。にわとりのけたたましい声までまじった。

「歓迎のあいさつらしいね」と川辺が苦笑した。

「うん。そうらしい」大賀はふざけてちょっと登山帽に手をかける。しかし、人の姿は見えない。

「どうしたんだろう。誰もいない筈はないと思うけど」

二人は谷川の草の上で、少し早いが弁当にした。食べながら大賀はふと陶淵明の

「桃花源の記」を思い出した。

流れに添って一人の川漁師が山奥へ上っていき、全く世間から隔絶した山中に数百年間平和に住みつづけてきた中国の村の話で所謂「桃源境」の故事だ。

「いくら野生でも村の人にことわりなしに、わさびを取ることはできんでしょう」

川辺が言う。うん、と大賀がうなずいた。

「ちよっと困ったな」

しかし一人が食事を終わつた頃、うまい具合に家の軒に一人の男の姿が見えた。大賀の知り合いの藤川良三さんであった。

母栖の出身者で今は神戸市にいる青年の結婚式に招待されて、村の者はみんな龍野へ行き良造さん一人、留守番にのこって、午前中山へ杉の植栽を行つていたらしい。

「ああ。好きなだけ取りなされ」

と、良造さんは、こころよく言ってくれた。山の湧水を家に曳き込んだ樋は、太い木の幹をくり抜いた見事な風格のあるもので、地上二、三メートルもの高さに三脚で架けてあつた。その下の湿地や水槽のわきにわさびは自生していた。わさびは根を地中にのこして鉢で茎と葉をとる。

高台の家の縁側で藤川さんからお茶を馳走になつた。お茶をのみながら谷を見下ろす。時の停まつたような閑かさである。

一時間ばかりお邪魔して二人は山を下りた。

「那智の沖で維盛が自殺したあと、北の方はどうなる」と川辺謙助がたずねる。

「一家の悲劇はまだまだ続く。大覚寺の奥に隠れ住んでいた維盛の遺族は褒美に目のくらんだ町人共に訴人され、維盛の子六代御前^{むちよ}が北条時政の手の者に捕らえられる。北の方は必死に高尾の文覺坊^{ぶかくぼう}にすがり六代の命ごいをする。文覺坊はかつて伊豆の蛭^蛭ヶ島に流れていた頃朝に、平家追討の旗上げをすすめた、頃朝にとつての大恩人、その上人の庇^ひいたてで六代はかろうじて一命がたすかるが、しかし源氏はおどろくばかり執念ぶかい。頃家將軍の代になり六代が三歳にもなつてからとうとう我慢しきれず、高尾で三位禪師と名のつて出家していた六代をとらえて関東に向させ、途中田越川の河原で斬つてしまふ」

「田越川？」

川辺は不意に足を停め目をみはつた。

「田越川なら逗子市を流れている川だよ」

そしてまた歩き始めた。

「ふうん。逗子市まで呼びつけて殺すのか。そんな事をやるから源頼家も、あんなひどい最期を迎えるわけだね。因果応報^{因果応報}というやつだ」

「うん、源氏のやり方はきわめて冷淡無慈悲や。宗盛清宗親子や重衡なども、首にして都大路をひき回した上、獄門^{獄門}の木に架けている。——三位以上の人の頭、大先蹤^{先蹤}をきかず。生きての恥、死んでの恥いぢれもおとらざりけり——

と、「平家」の作者もなげいている。これに比べると平家の公達の方がはるかにおだやかに人間らしい。敦盛、忠度、經正、みんな文化人や。維盛も脆いけれど人間味があつてええし教経や知盛の最期なども実に深味がある

「ところで、その富士の局は、どうなるのかなあ」

「維盛との間にできた遺児と共にひそりと貧しくしかし平穏に暮らしたかもしれんし、実在の人物ではなかつたのかもしれない。伝説^{伝説}というのは、すべてここから見える

山崎の町の如く春霞の中や。それでええのや」

「もう一つ、こんな話をしようか」

坂道を下りきつて道がずっと広くなつてから、大賀は横に並ぶ川辺に話しかけた。

「この間、江戸時代初期のある文書を読んでいたらね、こんな話が載っていた——」

一人の武士が二年間の江戸勤番を終えて郷^{むち}へ帰つてみたら、留守を預かっていた妻が、ことある間に召し使つた下男と駆け落ちして姿をくらましていた。武家にとつては何とも不面目きわまる話だから男の留守中は、親類中が必死になつて世間に隠していたが、そんな不祥事が外へ洩れぬ筈がなく、男も親類も世間のもの笑いになつてしまつた。

それで男は帰国早々、親類中から不埒を働いた妻と下男を捜し出して討つ、つまり妻仇^{めがな}き討ち^{めがな}に出立させられる事になった。妻仇^{めがな}き討ちは、この時代の武家社会の撻だからいやもおうもない。やらなければ武家としての面目が立たんのや。

ところがその出立の直前、男の仕えていた主家が、お家騒動を理由に幕府から改易（取り潰し）を命じられてしまう。男もその親類たちも主家を失つて浪人となり、住んでいた家も明け渡さねばならなくなつた。

仕方なく荷物を整理しながら、しかし男は妻仇^{めがな}き討ちをせずに済んだ事に内心ほつとしていた。結婚する前から自分はそこに女をつくり、結婚後も女出入りの絶えた事がなかつた。つくづく考えてみると、妻が自分に愛想をつかすのも当然のこと。その妻が駆け落ちしたからといって、討つなどとてもできない、ああよかつた——と思つた。

「へええおもしろい話だね。で、この母柄とは何か関係があるの？」

「いや、直接にはないんだけど、その片付けをしていると、頗見知りの古道貞屋がやってきて、男に、自分のきいた噂話を話す。男の妻は下男と共に、ある人里離れた山の中の村で空家を借り、畑を開いて仲好くらしている。その村というの、名は書いていないが、平家の落人伝説のある村で、男はそれを聞いたとたん、何だかむしょうに妻がいとしくなり、会つてこれまでのことを謝罪したくなつた。で、そこへ登つていく——。

残念ながら話はそこで終わっているのやけど何となく心にのこる話なんや」

「事実だろうか、それ」

「うん——。事実か創作かわからんがその藩がお家騒動により改易になつたのは事

実で、以前から家中には勢力争いがあつてごたごたが続いていた——」

登り口に到着した。

停めているオートバイのバックミラーに西日が反射してキラキラ輝いていた。

第十七回 春の芸能祭^ご案内

日 時 平成八年五月十二日（日）

午前十時から
午後三時まで

場 所 サンホールやまさき（山崎文化会館）
主 催 サンホールやまさき（山崎文化会館）

後 援 神戸新聞社・山崎町教育委員会

会員の日頃の練習の成果を、ぜひご覧くださいますよう、
ご案内申しあげます。

参加部門

山崎詩舞道連盟
山崎謡曲同好会
山崎郷土芸能保存会
山崎邦楽邦舞研究会
さつき民踊グループ
播州山崎太鼓
(芸能祭実行委員会)

短歌

山崎智恵著
歌集『半夏生』（母への挽歌集）

山崎歌人協会 稲村幸子

「夏至に近づく頃、花とも見えぬ花を

抱いて半夏生は昨日、今日と頂きの葉を白く染めてゆきます。夕暮れ、木草が彩を失う時半夏生の白はもっとも美しく、不肖の子を抱く母の祈りの姿とも見えて心を惹かれます。この不思議な花の名をもらつて歌集名といたしました。」

山崎智恵様（本名きよ子）の第一歌集「半夏生」（はんげしょう）を紹介するに当たり、まず著者の「あとがき」の一節を記してその詩精神を探ることにする。

第一部「花枝」は昭和十九年より二年まで作者十七歳より四十歳迄の作。

・癒えし母となびて歩く日もあらむ桃の花枝を抱きて帰る

・衰えゆく母に食べさせす何もなく卵ふたつを妻と換えきぬ

・苦しみを終えたる母のおもざしの静かにあれば嘆かじと思う

・安志峠のぼりつめれば僕せの見ゆると何時より思いそめしか

・若き父母おなき兄ら住みしとう姫路

れて鍬の土かきおとす
育みて来しものを今は放たむに栗は幼き青芽をかかぐ

・吾がための書斎を欲しと希いきぬながく思える事のひとつに
・蟬丸を酔えば謡える夫に和し今宵は立ちてわが仕舞する

勤めを持つ主婦としての多忙な生活の中に子等は育ち、嫁ぎ、自分のための書斎が欲しいと希う心のゆとりを得、夫の生家に身を寄せ、兄達の夭折、母の死と、不幸の続く少女期の哀歌が多い。

・血縁の無きことも今は清しくて一生従きゆかむ一人の為に
・粥だけでも従きてくるかと言いくれき戦後といえる夏がありたり

・愛恋の理しらぬ稚さに契りて兄のごとく拋りにき
・孤独地獄に居た私に温い家庭を与えてくれました夫」とあとがきに謝辞を述べられている夫君石男氏との出会いも、戦中戦後の混乱の治まらぬ頃であった。

第二部「木槿」は昭和四十三年より平成元年までの作である。

・逆縁のみたりの兄もちちははも木槿の下のひとつ奥津城

・俯きてビルのトイレを磨くとき放埒に生きしとう父を想えり

・いつよりか人を頼まずなりたりと日暮

・みたり子を奪られし母は鬼子母神生きのこりたるわれは鬼子か

はじめに提示したあとがきの一節「不肖の子を抱く母の祈りの姿」という半夏生の形容の内意を私はこれらの歌により知ることができ、作者の繊細な感性とひたすらな母への慕情に瞼を熱くした。

・安志峠越えて逃れてゆく夢を見なくなりしは何時よりならむ
・風おちて雪となる夜をやわらかく彼岸にわが名呼ぶ声のあり

・後世は鳥に生れなむ深渓のけやきの細枝ゆりて遊ばむ
・夫も子もありて淋しき春宵や森をはなれて月闇まれり

・歳月は著者の悲傷を鎮め滤過し、美しい詩にまで昇華する。



山崎智恵歌集「半夏生」を語る会
10月11日

姫路市民会館にて著者

扱てこれ迄の歌の抄出は作者の境遇詠に偏ったかもしだれが、作者の境遇を離れてその人の歌は在り得ない筈である。

ここで、著者の師と仰ぐ人田井安曇氏の「跋」文の最後の章を拝借させて頂く。

「これらの歌を生み出させるのに彼女

の上を通りすぎたものが必要であつたといえは、それはあまりに文芸至上主義の物言いだと言われようか。とてつもない

不幸を生きたえて、今日この歌集『半夏生』を出す山崎さんに、私は心からの拍手を送りたい。彼女の歌は、ともあれか

くもあれ私を今敬虔に坐らしめるのである。何という優しく温かく、著者の人生成総てを抱き取って労られるようなおことはであろう。このよき師とのこよなき出遇いを著者のためによろこびたい。

最後に著者のヒューマンな性情の感じられる数首を掲げて終わりとする。

・戦傷のケロイド残る頬伏せて君はクラ

ス会の隅に坐りき
・路にたおれ意識うすれてゆくときも戦傷の頬を下に伏せしか

・たたかいの傷痕ふかく揃えされば君よ一生を娶らざりしか

・すこやかに育てと希い熊男とぞ名付けたましいやその父母は

・若ければうたがわざりし戦争に昂りて吾も送りし一人

平成七年霜月朔日記す。

各地短歌祭入賞入選作品

(平成七年度)

◇菅原道真公奉贊獻詠祭

(三月十九日・稻美町天満神社)

・特選・兵庫県知事賞

初金に出でゆく妻が仕事着のわれに点てたる朝の一服 森谷 康弘

・優秀

亡き夫の学びし部屋に長の子が移りて古き机に向ふ 安政 嘉子

信楽はいづこも小狸大狸寝狸屯し秋の陽に映ゆ 田峰 定子

・佳作

じかに伝はる 森本萬千子

側溝の流れを足に堰とめて田植終りし苗箱あらふ 森谷 康弘

半眼にのぞけば菩薩の見ゆる数珠日日うでにして夫は牛飼ふ 伊東まさ子

髪染めし若きが口笛吹きながら狂ひしファクシミリ忽ち直す 小倉 法子

・新樹短歌会

(九月三日・安富町農民センター)

・神戸新聞社賞

朝よりいくたび口笛吹く夫か独り暮らしの子が帰り来る 金付 靖子

・安富町長賞

しの子が帰り来る 金付 靖子

・入選

（十一月十一日・西播磨文化会館）

・獎励賞

蚊柱の意を確めし広辞苑それより午睡の枕となりぬ 安政 嘉子

・一葉会

事務局・須賀沢六八 山本千代方

電話 六二一三五九

・新樹短歌会

（十一月十一日・西播磨文化会館）

・歌評

栗山 節子

・事務局・西鹿沢 かしわの学園内

指導 稲村 幸子

・事務局・西鹿沢 かしわの学園内

指導 稲村 幸子

・新樹短歌会

（十一月十一日・西播磨文化会館）

・歌評

山崎 智惠

・事務局・上牧谷八〇三 橫野光子方

電話 六五一〇二〇一

・新樹短歌会

（十一月十一日・西播磨文化会館）

・歌評

伊東まさ子

・事務局・上牧谷八〇三 橫野光子方

電話 六五一〇二〇一

・新樹短歌会

俳

句

山崎俳句協会青嶺句会

田中良子

但馬路の出石へ吟行

前日のうららかな春日和とは變って、

生憎の雨降りとなってしまった。四月九

日青嶺句会の吟行の当日である。九時出

発参加者十七名、思えば昭和六十三年に

今は亡き和田疎人先生と共にこの地を訪

れた處だけに追憶するものがあり御健康

で在られた師のお姿が時折り脳裏をかす

め一抹の淋しさを覚えながら但馬路へと

車は向かった。

師を欠きし春の吟行雨やまづ 駆雲

亡き師との思いで胸に春吟行 とみ代

ここよりは流れ變りて春の川 薫風

川の流れが變った處で「ここからは円

山川になる」との事。この地に詳しい中

尾様のガイドに私達は両サイドの窓ガラ

ス拭く。進むにつれて雨に煙る山景は

まるで墨絵の様だった。その中に白い辛

夷が花の里に春を告げていた。

があつた。

一村に人影もなく花の冷

光子

そのかみの家老屋敷の木々芽吹く

山脈句会詠草

• 12 •

虫すだく父母亡き夫のありし日も

花の雨隠し一階の武家屋敷 千代重

春昼と云へど灯して隠れ部屋 泊水

東千草

放埒の葛をゆるして摩崖佛 池田陶瓦

天向けてロケット發射風ひかる

八木町公民館をお借りして昼食の後投

句。時折り城下町を馬車が行く。その蹄

の音が雨の坂道に情緒あふれるものをか

もし出す。予定通り披講し和やかに終る。

誰からとなく「そば処に来てそばにあやからないと」と言う声が出た。

大山をのぞむ登山路雪しぐれ 小倉つね

ふたたびの出石の花や師は遠く

千里 芽柳や格子戸続く城下町 良子

光り合ふ陶器の肌や春の雨 悅生

古めきし柳燈籠悲恋塚 寿女

軒連らね白磁の館花の雨 美保子

出石のまちは城下町として数百年の歴史を刻み、今もロマン溢るる町として観

光客の絶え間ない処だそうだ。

出石の傘の触れゆく花の雨 小次郎

全員暖簾をくぐる。

遅参詫ぶ一杯機嫌や花の冷 光栄

雨の吟行も又たのし。亡疎人先生と共に

に訪ねた七年前の出石吟行はすばらしい

花日和であった。師を偲びながら雨の出

石を後にする。

雨の中散策しつつ家老屋敷に入る。こ

こは江戸後期の上級武士の居宅であった

そうで隠し二階があり興味をそそるもの

があつた。

新涼や墨の香すがし書き励む 小畑

寒九の水飲めば鋼の味がする 小紫いく

新涼や素肌になじむ白木綿 高野南嶺

屏風句は播水疎人冬ごもり 高野薰風

新涼や墨の香すがし書き励む 小畑

寒九の水飲めば鋼の味がする 小紫いく

新涼や素肌になじむ白木綿 高野南嶺

屏風句は播水疎人冬ごもり 高野薰風

屋上に音なく星の流れ落つ

佐古井昭子

繕ひつ辞書くる日々や秋灯下

田中やえこ

種袋時き時母の筆の跡

田中 恵

遠き日の思ひ出秘めし古日傘

田中 好江

清水湧く祠にひびく銭の音

西村 信子

若き娘の日傘目を引く田舎道

西塚 粛月

ちちははの墓の影濃き萩咲けり

畠林かづえ

吊橋に傘二ツ三ツ谷若葉

原田 久代

被災地に人の情のしみる春

姫野マサ子

句座果てて釣瓶落しの道急ぐ

前野さつき

米寿祝ぎ子等の集ひし菊日和

山野 源子

雪乞ひをしつゝ客待ち雪を待つ

田中 良子

駆け回る子を追ふ母や春の風

鳥羽チエノ

湯けむりの深し冬めく旅の宿

友沢 恭子

川の名のこゝより変る猫柳

永井とみ代



青嶺句会詠草		日曜と云ふ安らぎの夕端居		さわらび句会詠草	
顔を包めば眠る納め雛	かほせ	川の面の光を集め猫柳	中尾 悅生	秋落暉染めし川面の薄れゆく	川崎 栄子
廃坑の口とざされて青芒	かほせ	大屋根の鳥の睦言彼岸寺	原田 小次郎	みどり児の寝入る重みや聖五月	山中 正子
師の計報伝はり伝へ春時雨	かほせ	沙羅の花一期一会の坊泊り	原田 駆雲	梨噛めば故郷の味口に満つ	小林 紫生
秋久 光子	かほせ	思ひ出をまだ捨て切れず秋扇	大谷 延子	パン種の酵母のつぶやき明易し	草の実の添ふごと添はむ夫や子に
石野 光栄	かほせ	端居して心許せず相寄らず	岸野 昭三	納骨の読経に和して蟬しぐれ	白式部紫式部と風に揺れ
原田 小次郎	かほせ	八十路来て尚春風を待つ心	高野 南嶺	秋風や還らぬ旅に又一人	壇阪加代子
原田 駆雲	かほせ	どこよりも落着く我が家扇風機	高野 薫風	ランドセル畠に並べて赤のまゝ	梨噛めば故郷の味口に満つ
春名 寿女	かほせ	天逝の墓石の小さし赤のまゝ	藤家 千代	秋森や鶴のスープを丁寧に	みどり児の寝入る重みや聖五月
千里	かほせ	山口 栄子	山口 栄子	紫禁城玉座に秋日とどかざる	川崎 栄子
秦 千代	かほせ	朝霧に梢はさめず夫婦杉	門積 緑山	汗の子や逢はざりし日の重さ抱き	山中 正子
薄木満寿恵	かほせ	萱茂り廃家と見しに灯の洩れて	植木 遥子	本條 淑子	草の実の添ふごと添はむ夫や子に
山岸 園子	かほせ	ゆるぎなき白亜の天守青風	藤井 七代	汗の子や逢はざりし日の重さ抱き	梨噛めば故郷の味口に満つ
山岸 園子	かほせ	黄を灯す師の好まれし石蕗の花	福田 泊水	壇阪加代子	パン種の酵母のつぶやき明易し
本條 淑子	かほせ	駆け回る子を追ふ母や春の風	鳥羽チエノ	原田 小次郎	納骨の読経に和して蟬しぐれ
山中 正子	かほせ	湯けむりの深し冬めく旅の宿	友沢 恭子	中尾 悅生	秋落暉染めし川面の薄れゆく
永井とみ代	かほせ	川の名のこゝより変る猫柳	永井とみ代	川崎 栄子	梨噛めば故郷の味口に満つ



和田疎人さんを悼む

山崎俳句協会 福田泊水

五十年近く疎人さんと親しんで来ましたので敢えてさん付で書かせて頂きます。

未曾有の大惨事となつた阪神大震災から十日目の平成七年一月二十六日夜九時五分和田疎人さんが急逝された。定例句会を一度も欠席される事のなかった疎人さんが昨年秋頃より欠席されるようになつたが、ご体調には変わりないと事だったのに急に逝かれなんて信じられなかつた。

私はこの訃報を翌朝知り驚きすぐお伺いすると、大勢のご家族ご親戚の方に見守られお安らかに眠つておられた。何のお苦しみの跡もなく穏やかなお顔に「疎人さん」と声をかけると起きられるようであった。これで永久のお別れになるかと思うと涙が溢れた。

疎人さんは昭和十五年頃よりホトトギス、九年母に投句されて以来九年母一筋に五十嵐播水先生に師事して来られた。そして、終戦間もない混乱の昭和二十一一年山崎に青嶺句会を結成され主宰者として伝統俳句を守り続け、多くの門下生を育成された。

私は昭和二十二年に入会、その疎人さんの良きお人柄また疎人さんの素晴らしい

い俳句に魅せられ、今日まで続ける事が出来た。

疎人さんとの思い出は数多いが、中でも印象的なものを挙げると昭和二十四年同志と共に俳誌「青嶺」を創刊、その選者としての抜群の俳句力及び懇切なる選評は多くの投句者の好感を得て三〇〇部余も発行出来たことは疎人さんのご人徳というほかありません。

昭和三十六年疎人さんのご尽力で九年母会山崎支部が創設されると率先して誌友の勧誘に努められ、山崎から五十余名が投句するようになり支部発展に大いに貢献された。昭和四十三年には疎人さんの還暦祝賀俳句大会が播水先生ご夫妻をお迎えして盛大に行われた。

播水先生のお祝句
春立ちて即ち還暦男なる 播水
の句を大へんお気に入られ喜んでおられた。またその九年母三月号に同会の門積緑山君が巻頭私が二席に入選し疎人さんが笑顔で私の還暦に何よりの贈物をして呉れると、とても喜んで下さった。

昭和四十四年九年母五〇〇号を記念して疎人さんが九年母推薦作家並に九年母添削者に同時推挙され、後進の指導に取

組まれることになった。特にきめ細かく優れて丁寧なる添削は好評で多くの誌友

から添削が寄せられ、逝かれる直前まで続けておられた。

昭和四十七年に開設された山崎老人大学では俳句の講師として老人に俳句を教え、また多くの新人を育成された。

昭和五十五年疎人さんの句碑
麦笛や夕靄町の灯を包む 疎人
の句碑除幕式では「今日は私の人生最高の佳き日」と喜んで下さった。

疎人さんの数々の功績を讃え昭和五十八年には山崎町文化功労賞が昭和五十八年には兵庫県の「ともしびの賞」が贈られた。

疎人さんはお酒を好まれ酔わると若々しい美声でよく唄われた。またとても愛妻家であり、お洒落で素敵な帽子を何時も愛用されていた。

疎人さんの葬儀の日は暖かい日で疎人さんを偲ぶ各地からの弔問者が山門に溢れ最後のお別れをした。

ここに疎人さんのホトトギス（高浜虚子選）入選句と数多く寄せられた弔句等をご紹介し心からご冥福をお祈りする次第です。

弔句

君逝くや臘梅の香に送られて
梅探る黄泉の旅路の安らかと
悼む月丸きが悲し寒ながら
涙爛と妻を愛した人逝きぬ

牙返る夜の寝ねがてに君偲ぶ
妻笛や夕靄遠く遠く消え
妻笛や夕靄遠く遠く消え
妻笛や夕靄遠く遠く消え

天界の寒月句座に発ち給ふ
沈丁の香に誘はれて逝きませり
師で父で兄で友とも梅の葬
邦比古

とみ代
八重
千里
君子
光榮
薰風
東軒

寒風に大樹の影を失ひて
踏に師の冬帽子見失ふ
天界の寒月句座に発ち給ふ
沈丁の香に誘はれて逝きませり

師で父で兄で友とも梅の葬
邦比古

とみ代
八重
千里
君子
光榮
薰風
東軒

俄かなる計に寒月を仰ぐのみ
やさしさの溢る遺影梅二月
春星となりて見守り給へかし
延子 千代

眼つむれば笑み浮かび来る冬の月
沈丁の香に誘はれて逝きませり
天界の寒月句座に発ち給ふ
沈丁の香に誘はれて逝きませり

やさしさも厳しさもあり寒椿
早梅に二度とまみえぬ師を偲ぶ
笑み給ふ恩師の遺影梅香る
師を偲び句碑に立ちませ春浅く
良子

句碑を背に優しき笑みや寒の月
恭子

白一輪墓前に手向けん冬薔薇
南嶺

まなうらに万年青年冬帽子
栄子

まみゆるもすでに遺影や梅の花
壽子

師を悼むかに風花の舞ひに舞ふ
泊水

このまゝ老ゆ我ならず懷手
（平成七、一〇記）

ウソと科学の眼

日本経済新聞社科学技術部次長

中嶋彰（山崎町鹿沢出身）

「ところは江戸。享保〇〇年の元旦」。徳川吉宗の命を受けた、お庭番は、尾張徳川家の藩邸に忍び込んでいた。何かと幕府にたてをつく尾張家藩主、徳川宗春の言動を探るためにある。お庭番は、頭上の満月の光を避けるため、藩邸の庭の茂みに身体を隠した。」

さて、この文章の中に明確なウソがあります。何でしょうか？ご年配の方ならすぐ、お分かりになるはずです。月の運行に合わせ太陰暦を使っていた江戸時代の満月は十五日。お正月に限らず月初めの一月の月は新月で、空に月は見えるはずがありません。ウソにもいろんな種類があります。ここで紹介したような、ちょっと調べれば簡単に白黒がはっきりするウソはまだ、可愛いウソといえるでしょう。けれども、かなり複雑なウソのつき方もあります。長い間、本当のことを言わずに隠しておくこともウソ同然と受けとられ怒りを買う場合があります。

最近、日本の大和銀行が行員の米国債不正取引に関して隠蔽工作を組織的に行つたとして米政府から「退去命令」を受けました。日本の大蔵省も事実を知りながら米国への連絡を長期間、怠った、として批判を受けました。

薬害エイズ。日本では血友病患者が多数、エイズにかかっています。医者が血友病患者に投与した血液製剤にエイズウイルスが混入していたからです。なぜ、こんなバカなことが起つたのでしょうか。厚生省が危険を知つていながら問題の血液製剤の販売・投与を二年以上も放置・黙認したのが原因といわれます。同様の事件が起きたフランスでは医薬品の安全審査の責任者が実刑判決を受けています。どうも「お上（かみ）」のやることは、おかしいようです。

閑話休題。科学の世界では、最近、面白い理論が登場しています。例えば、こんな事件が新聞の社会面で時々、報道されます。「子供が橋から転落し川に流された。父親が川に飛び込み子供を救つたが、子供を岸に運び上げた直後、父親は力つきで死んだ」。親の子供に対する愛情を示す美談といつていいでしょう。ところが遺伝子に関する最新の理論「利己的（りじてき）遺伝子説」は、この美談はウソだとい

うのです。

新説は、こういうふうに説明します。親が川に飛び込むのは、身体の中の遺伝子に命じられたからに過ぎない。遺伝子は次の時代に自分自身を残したい、生き残りたいと考える。遺伝子は親の身体にも住んでいるし子供の身体にも住みついている。すると親より長生きする子供を救う方が自分にとって有利だ、よし父親を飛び込ませて子供を救わせよう……。

時には二人とも溺れ死ぬ悲劇も起こります。でもたいていの場合、父親は自分の生死をかえりみず頑張るので子供はまず助かる。一人とも生き残る確率もかなり高い。美談の裏には生き残りをかけた遺伝子の冷徹な計算があるのです。遺伝子を住まわせてやっている宿主の人間の尊厳にはほとんど考慮しない、この遺伝子の身勝手な振舞いはいったい何でしょう。身勝手な遺伝子という意味で、この説は利己的遺伝子説と呼ばれています。ウソかと思われるかも知れませんが、この説は今や学界では主流の説となっています。

身勝手といえば鯨を食べる日本人への国際社会からの批判もまた身勝手なものといえるでしょう。牛や豚を殺して食べる欧米人が、鯨を食べるからといってなぜ日本人を非難できるのか、私には理解できません。「鯨は知恵のある高等動物だから」という理屈は成立するのでしょうか。幕末、日本に開国を迫った米国のペリーの艦隊の直接の目的は、太平洋で鯨を捕らえる自国の捕鯨船団の補給基地を日本に設けることだったといわれています。鯨をめぐる日本叩きには何やらウソが混じっている気がしてなりません。

今、私は日本経済新聞の科学技術部に勤務しています。世の中の森羅万象のベールを「科学の目」ではがし本当の姿を世間に伝えるのが仕事です。時々、相手の話を聞きながら「この人の言うことは本当かな」とつい懐疑的に相手を眺めている自分を発見して驚くことがあります。新聞社に長年勤めて身にしみついた性（さが）なのでしょう。ウソを見破り、科学の目で真実を伝える。科学記者の生きがいはここにあると考えます。言い方がきれい過ぎるでしょう。最後の段落には少しウソが混じっているかもしれません。

筆者のプロフィール

1973年 山崎高校卒、東京大学入学
1977年 東大工学部原子工学科卒
日本経済新聞社入社
現在 日本経済新聞社科学技術部
次長

新しい眼科の手術と山崎町

医療法人財団神戸海星病院理事長・病院長

山 中 昭 夫
(山崎町西町出身)

私は昭和五年十月四日山崎町西町に生まれました。小さい時から工作が大好きで、当時第二次大戦の最中であったせいもあり、大きくなったら飛行機作りの技師になりたいというのが夢でした。

併し、昭和二十年の敗戦で当時旧制中学三年そろそろ進学の準備をして何かにならなくてはならないということで、只なんとなく代々続いてきた家業に向けて、兄の後を追いつゝ、いつとなく進路が定まってしまいました。医大を卒業してしまいました。

専門を決める段になり、何にしようかと考えましたが、好きな外科は兄がすでになつてるので大いに困りました。いくら何でも幼稚園から小学、中学、大学予科、本科と兄の後ばかり追って來たので、せめてここらで別の生き方をしたいと考え、たまたま縁で親しくしてもらっていた方（後の諫山教授）が眼科に居られたことと、また当時の眼科教授であられた井街先生が脳外科もやっておられたこともあり、フラフラと眼科に入ってしまいました。

併し、子供の時から山崎での父親の医者の生活を見ており、医者はこんなものだという観念が染みついていましたので、果たして眼科で一生食べて行けるのかどうか不安でした。最初の手術日に教授の後について手術場に入つて行きながら、つい「先生、眼科で本当に一生食べて行けますか？」と尋ねてしまい「しまった！」とは思つたのですが、もう仕様がありません。その時先生は憤然と「僕はこれまで、ちゃんと食べてきているよ」と言われ、すぐさま手術場へ入つて行つたことを今でもあります。そういう次第で、ただ何となく眼科医になつてしましました。

ところが、運良くこの仕事が私には合ついたらしく、やることなすこと面白くて仕方がありません。大学を出て今の海星病院の眼科を始めたのが、昭和四十七年の夏ですが、それからも二つの新しい眼科の手術が行われるようになってきて、それをたまたま自分で開拓していくような形になつてしまいました。一つは白内障の手術の時に、ついでにプラスチックのレンズを眼の中に埋め込む眼

内レンズ移植術で、もう一つは、それまでには不可能と思われていた眼の中の硝子体というところの濁りや、それと関連して網膜そのものを手術する硝子体手術という手術です。

夫々昭和五十年と五十一年に始めたのですが、どちらも当時少数の人しかやっていなかつたため、たちまちにして大勢の人々と仲良くなつてしまい、日本中、世界中に本当にたくさんの友人が出来てしまいました。

併し、何しろ新しい物質を手術で眼の中に入れ初めたのですから心配で仕方ありません。たまたま患者さんで神戸大学工学部の教授であられた松本先生に、私が手術した実例をお見せして、果たしてこのプラスチックは眼内で長期間もつでしょうかかと相談しましたところ本体の光学部のPMMA（アクリルの一種）は大丈夫ですが支持部のナイロンはそんなに強くないですよと教えられ青くなつてしましました。すぐ種々のメーカーに夫々の成分を問い合わせて回りましたが、いずれも企業秘密ということとで門前払いをくつてしましました。

幸い、その松本先生がウチの助教授をしている中前君（今の中前勝彦神戸大教授）に調べさせたらということで、急速いろんな眼内レンズを買い集め、夫々の成分や劣化の具合を調べてもらい、二人の名前で発表したところ、何とそれが世界で最初の眼内レンズの組織立ったバイオマテリアル（生体材料）の研究発表になつてしましました。

そういうことで中前先生と共同研究を始めたのですが、相当経つてから先生のご出身地を尋ねましたところ「山崎高校（三十一年卒）出て保証人は出石の猪尾メリヤスの猪尾健一さん（小生の叔父）です」ということで大変びっくりしました。世の中本当に狭いです。先生のお陰で県の科学賞をいただくはめになりました。また、日本のバイオマテリアル学会でも功労賞をもらつてしましました。

おまけに今は世界眼科レンズクラブの副会長やら日本眼科学会の評議員やら、その他いろいろな名誉などをさせてもらっています。

ところで眼科で一生食べて行けるかというお話をどりますが、確かに食べてはきましたが、これだけの大きなことが出来たのは、実は父や兄に始まり、猪尾の叔父さんや、小学校、中学校を始めとする同級生の皆さん、壱阪さんを頂点とした山崎町の皆さんとの暖かい支援があればこそ出来たので、決して眼科だけでこれだけの仕事が出来た訳ではありません。好きなことをして、大勢の方にとくに山崎町の方々に困った

ことが起きたたびに助けてもらつてここまで来たというのが実状であり、本当に有難く思つてゐる次第です。

なお、末筆ながら今回の震災で町をあげて我が病院を御支援くださつたこと、心より御礼申し上げます。

筆者のプロフィール

- 昭和32年3月 神戸医科大学卒業
昭和41年4月 神戸大学医学部文部教官助手（～昭和47年3月）
昭和41年4月 神戸大学医学部非常勤講師併任（～昭和61年3月）
昭和47年4月 神戸海星病院眼科医長（～平成元年9月）
昭和63年11月 日本バイオマテリアル学会標準化委員長
平成元年10月 医療法人財団神戸海星病院理事長・病院長就任現在に至る
平成元年11月 兵庫県科学賞
平成2年7月 関西・日本ボリビア協会 会長
平成2年11月 兵庫県医師会功労賞
平成6年11月 日本バイオマテリアル学会功労賞

共同研究者 中前勝彦教授のプロフィール

- 昭和31年3月 兵庫県立山崎高等学校卒業
昭和35年3月 神戸大学工学部工業化学科卒業
昭和37年3月 京都大学大学院工学研究科修士課程修了
昭和41年6月 神戸大学工学部助教授（大学院工学研究科）
昭和50年3月～昭和51年4月 米国テキサス州 Baylor大学 Malcolm Dole 教授のもとへ留学（博士研究員）
昭和60年 神戸大学工学部教授
その他の 東京大学、京都大学他多数の大学の非常勤講師を務める

山崎文化協会二十周年回顧

新宮町に西播磨文化会館が建設されるということがあり、県から西播磨の文化の連絡は市・郡単位であり、その内容も各種の文化団体全てにわたつて事が多かったようです。宍粟郡にはそれに対応できる組織がなかつたので、とりあえず当時山崎美術協会長であった伊藤親保氏がその対応にあたられました。

しかし、全てにわたつての対応は難しく、各

協会が創立された頃

福岡久藏

本来、文化というものは人々の生活に潤いや安らぎを与えてくれるものであり、

なければならなかつたようです。そこで伊藤親保氏や友沢庄二氏が中心になつて各種団体に働きかけをされ、昭和五十年四月に十九の団体の理解と参加を得て、山崎文化連盟が発足したのです。初代会長には前野四郎氏が就任されました。

私が事務局長を仰せつかったのは創立二年目でした。会長さんは「文化連盟が中心になつて特別に事業を起こさなくていいのです。文化連盟は各種団体それぞれの事業そのものが連盟の事業なのです。」

新宮町に西播磨文化会館が建設されるということがあり、県から西播磨の文化の連絡は市・郡単位であり、その内容も各種の文化団体全てにわたつて事が多かったようです。宍粟郡にはそれに対応できる組織がなかつたので、とりあえず当時山崎美術協会長であった伊藤親保氏がその対応にあたられました。

しかし、全てにわたつての対応は難しく、各種団体相互の連絡調整的な組織を急ぎつくらなければならなかつた

などが協会の事業として実施されるようになつたことを思うと隔世の感がいたし

ます。と常におっしゃっていました。私は正直に、年に一度の理事総会の議案書を作つただけに終わつたように思います。私のように社会に疎い人間では解らなかつたようですが、創立期だっただけに各種団体の確執は強く、内々には連盟に対する疑心暗鬼なところもあつたようです。現

たのように各種団体が一堂に集まり、「春の芸能祭」や「秋のふれあい文化祭」

スクイム市民との交流について

訪問合唱団代表 藤井慧乘

スクイム市民十七名の皆さんを見送つて、もう一ヶ月になりますのに、家中に写真やら、頂いたお土産などが散見され、思い出尽きないものがあります。

さてスクイム市との交流は、調査団も含めて、お互に四、五回の訪問を重ねて理解を深めて参りました。その結果交流の輪は、市と町との公共の施策から始まり人と人との交流、合唱団・舞の会の文化交流、中学生達のホームビギットなど、当初の目標以上の大きな成果が育ちつつある様です。

即ち本年五月、スクイム用水開設百年祭には、合唱団・舞の会計八十数名が大挙して参加して参りました。ステージでは日本歌曲の演奏、続いて日本舞踊。これが終了しますと聴衆総員起立してアンコールを求められました。又パレードでは、シャントコ太鼓のトレーラーを先頭に、一同山崎祭りのハッピ姿で行進し市民の大歓迎を受けました。ホームビギットは、習慣と言葉の関係で遠慮勝ちの気分が先行しましたが実施して見ると、言葉の障害を超えて通じ合う心をお互いに発見して、和やかな雰囲気に終始して喜ばれました。又中学生のホームステイは、

生徒が立派に会話が出来た事で、すばらしい成果があった様で、お別れは、涙又涙の感動があつた様です。

◎求める文化の共通点と相違点

私達の生活文化は、戦後五十年の歴史を経て欧米化されて参りました。山崎ジャスコでの買物のファッショニは、子供から高齢者まで、そのままロスでもニューヨークでも通じます。食事のメニューなど世界一豊富で美味ではないでしょうか、スクイムの皆さんは『ワンドフル』と喜ばれる共感があります。

然しながら、私達がスクイムを訪ねるとき一般海外旅行同様の、観光・買物気分が主目的の考え方はないでしようか。スクイムの人達は、それも勿論ありますが、主目的は、本当の日本文化を学びたいと思っています。不便だけれど日本旅館に寝てみたい。八幡神社の森に感動し、楠風閣に日本の秋を発見したとか……。ここにお互いのワンダーフルする所の相違点を感じた事でした。

◎悲しみといったみを共にする交流

過日スクイム来訪団が帰国される前夜代表者シーリー先生より、南川一三氏・谷口成八氏是非お会いしたいとの申出

がありました。兩氏は、広島原爆の直下にありながら奇しくも無事生還された経験者です。南川氏は農業委員会々長、谷口氏はその時の町会議長という役職上第一回調査訪問団として訪米されたもの内心には、原爆投下に通ずる無念の思いも残っておられたのでしょう。他の参加者の様に心を開いて大賛成今まで至らなかつた様でした。この事を敏感に察知されたのがシーリー先生であります。実はシーリー先生もその当時アメリカ海兵隊員として、中国で日本陸軍の恐ろしさを充分に知り、真珠湾攻撃に対する憤りと様々のストレスより、しばし横道に逃げる苦しい時期があった様です。その苦しみより自覚められたのは、信仰深い御



父上の少年時代の宗教教育があつたからです。其後一変して神の教える宣教師の道を進まれあれ程の憤りを越えて、日本での宣教三十五年に及びました。そして山崎との交流の中で、南川、谷口兩氏との出会いがあり、兩氏より原爆のお話を更に聞きたいとの申出があり戦後五十年のこの年、日本最前線にあつた兵士達の会見が出来たという次第です。ここでシーリー先生は心から原爆を謝罪され、私達日本兵士も又、戦争に参加した罪を謝罪した事でした。

今私達は恩讐を超えて、共に喜び共に悲しみ合い友好のプログラムを展開したいものです。

夢
無
情

山崎郷土研究会

堀口春夫

最近最上山の鐘の音が聞けなくなり寂しく思う者の一人ですが、江戸時代より刻の鐘として何百年か続いた鐘の音は山崎名物の一つであった。江戸時代迄は八幡神社の神護寺の梵鐘が城下町に刻を告げていたが、寺が無くなつてからも神社に鐘守が居て日に何度も鐘を撞いていた。明治、大正の頃まで続いたが、鐘守の老人が死に一旦途絶えたので町の有志が寂しく思い寄附を募つて今度は最上山に大正十二年鐘楼を建て、日に三度撞くようになつた。戦時中鐘の供出で一時中止になつたが、昭和二十四年より又復活し鐘を撞く様になつた。鐘の響きは町民のやさらぎの一つである。山裾には寺の甍が連なり鐘の音が陽に響き陰に籠り余韻を長く引き、音の波紋を拡げて行く。城下町にふさわしい音であった。それがどうした事か近頃聞かれなくなつた。今は時計が普及し、時報も鳴っているし、時を知らせる必要はないが、なんとなく淋しい。時代の変遷とでも言おうか、鐘を撞く人にとっては生活の束縛でもあ

る山は町民の憩いの場である。山寺の鐘の響きはなお懐しい。上の山を最上山との上有ったのは明治二十年頃、町の有志が備中の高松稲荷を迎えてからで呼ぶようになったのは明治二十年頃、町の有志が備中の高松稲荷を迎えてからである。最上位経王稻荷大菩薩の最上を山は古城篠の丸の異己曲輪の一郭であった。昔は尼ヶ端と言つた。天文の昔一時尼子氏が播州を征服し、此の地の鹿沢に砦を築き代官を派遣し、山の先端に尼子の物見櫓を設け六糸勢の動きを監視した。よつて上の山を尼ヶ端と言つた。通称千畳敷は平太丸と言つて篠の丸城第一の砦で宇野氏の陣があり、山上で宇野氏と尼子が対峙していた。永禄九年尼子の本城月山富田城が毛利に亡ぼされると、期せずして鹿沢の尼子の陣は宇野氏に急襲され、悪代官江津の四郎は首を斬られて鼻をそがれ、尼子が端に梶原されたと言う。よつて尼が鼻とも言う。近頃各地砦跡に城を型取つた望楼が造られて観光の呼び物になつてゐる。山崎も城下町の象徴として上の山に中世の古城を生かすか、鹿沢の新城（江戸時代の藩庁）を生かすか、いずれにしても町民の総意が城下町の観光イベントに働く限り夢の城下町は実現しないであろう。

中国岷江源流の探索記

播磨さつき会 長田一三

植物の同好なまが四川省の奥地岷江の源に広がる秘境九寨溝や黄龍に於て原生林と湖の山間地帯で高山植物の宝庫を探索するという目的で昨年七月三十日より八月八日までの十日間冒険の旅を実現いたしました。

中国旅行社のバスには同社の国際部長さんと運転手、通訳に私達九人の総勢十二人が同乗者であります。出発半日にして土砂崩れのため通行不能となり路線変更を決断し日程を一日追加することになりました。迂回路は大きく西に向かった二人がベット族が生活している地帯です。

難路を進むうちに理県にてチャン族の民家を見せてもらつたが石積の家で屋内は雑然とした土間など三部屋で一昔前の身近な農家を思い浮かべました。真夏ではありますが白菜やキャベツを収穫している高冷地帯であり附近の山は高い岩山で森林は全くありません。少し過ぎた所で又落石地があり道路事情は極めて悪い事態を痛感いたしました。やがてチベット族が住んでいました。やがてチベット族施設に一泊する事になりました。標高一七五〇mです。浴室もトイレも個室でなく個別で分けられている程度で感慨深い

故 坂東寿々代師匠追善

「おどりの会」によせて

山崎邦楽邦舞研究会 郁踊会

衣 篓 トシコ

いよいよ、「おどりの会」の日が来ました。気がかりにしていた天候は、あいにくの雨! 寿々代師匠がお淨土から流された嬉し涙の雨だと思いました。

しかし、この様な悪天候にもかかわらず、館内は溢れんばかりの観客で、アンケートによれば「会場整理が必要」とのご意見も頂いた程の大盛況であります。これも、地域の皆様方の古典芸能(舞踊)に対する関心とご理解の賜ものであつたと、有難く感謝致している次第です。

会に至るまでを振り返ってみれば、いろいろな事が思い出されます。寿江予志師匠の意中を耳にしたのは、昨年八月初旬、「古典舞踊で、舞台衣裳、化粧等を本格的にし、近年山崎町では見られなかつた大舞台を演じたい。」と申された。その時、みんなは「瞬顔を見合わせ『うまく出来るかな。』といった顔つきだった。本決まりになつたのは、十一月頃です。

四社中が、合同で会を持つ事になり、出し物、持ち時間等が決まりました。私は、お連れと二人で長唄の都鳥を舞うことに

なり、本年二月より稽古を始めました。

衣裳は据引きなので、裾さばきも儘ならぬ有様で、会が近づくにしたがつて不安や焦りが出るし、お連れと邦舞の難かしさを語り、悩んだことも幾度か有りました。そんな私達を師匠は優しく、根気よく見守つて稽古をつけて下さいました。

そのうち、月日の流れるのは早いものでした。リハーサルの日がやってきました。その前夜のことです。全員集まつて稽古をした後で、師匠から明日の予定について説明があり、そのなかで、都合のつくる者は、寿々代師匠のお墓参りをする話が決りました。「おどりの会」の無事と成功を祈念しての墓参りでした。師匠のお考えに私は感動しました。舞の技量は言うに及ばず、何事にもよく行き届いておられる魅力的な師匠であられる。この様なすばらしい師匠との出会いを感謝し、『よし頑張ろう。』と心に誓いました。

明朝早く、師匠と弟子数人でお墓に参り、お水やお花をお供えし、今日明日の無事を祈つて晴れやかな気持ちで会館へと向つたのです。リハーサルも無事終わり本番の日も、私達の祈りが通じてか、何等失敗もなく無事幕を閉じる事が出来ました。これも皆様方のご支援の賜ものであります。また、寿々代師匠がお淨土でご照覧下され、ご守護のお陰と思います。誠に有り難うございました。

昭和会と私

昭和会 廣本正利

昭和会が結成されてから、来年は四十年を迎えることになりました。

私が入会させてもらった三十余年年前は会員は十二名でした。現在は会員数もふえて三十二名になりました。

いろいろな職種の方々とお付き合いをしていましたが、教職の道を歩んできた私の、一般社会をみる視野を広げてくださった方が、昭和会の会員のみなさんです。

例会での各種の講師の先生方のお話を聞いて勉強させてもらつたり、美術館や歴史旧跡を訪れたり、個人ではなくなかなかおられる魅力的な師匠であられる。この様なすばらしい師匠との出会いを感謝

が度重なつていくほどに、友としての信頼感が深まり、心を開いて話し合いでいる仲間が三十名もあることに感謝し、自分の幸せを本当にうれしく思つています。

平成七年度の行事

- ◎一月 総会・新役員の選出
- ◎二月 現在の学生気質
- ◎三月 阪神大震災被災地のボランティア活動に参加して

- ◎四月 健康と幸せを求めて
- ◎五月 健康診断
- ◎六月 会員旅行
- ◎七月 台湾の日本人学校に赴任して
- ◎八月 姉妹都市スクイムを訪問して
- ◎十一月 ファミリー旅行

祝合併四十周年

山崎町詩

山崎詩舞道連盟 小川登

祝合併四十周年

山崎町詩

賀	藤	中	山	清	川	嶺	四十	年
尉	鶴	國	崎	冽	川	町	周	年
不	道	國	嶺	田	詩	詩	四	十
惑	文	國	嶺	園	舞	舞	十	周
遥	化	嶺	嶺	園	道	道	四	年
衆	衆	嶺	嶺	園	連	連	十	年
庶	庶	嶺	嶺	園	盟	盟	四	十
雄	雄	嶺	嶺	園	小	小	十	年
豊	豊	嶺	嶺	園	川	川	四	十

七言絶句平起東韻

揖川清冽にして 田園豊に

藤鶴の文化に 衆庶雄なり

中国道は遙に 産業興り

新町は不惑 勢望隆し

東韻豊雄隆

この詩は、十一月三日の、第五回「秋のふれあい文化祭」において、私が吟じさせて頂いた漢詩です。

この詩は、私が作詞、作曲し、少林寺拳法山崎道院の筆頭拳士、中田、朱山両四段の実技を、詩吟に合せて演じて頂きました。折柄、米国ワシントン州、スク

イム市の親善使節団の一行も来ておられましたので、東洋武術の迫力と、東洋的芸能の片鱗を、お目にかけた次第です。

（筆者はワシントン州名譽市民です）

解釈

不惑 = 論語(四十而不惑)四十才の別稱
勢望 = 勢力と威望

漢詩の構成と作曲について

揖保川の水は清く澄み、田園都市山崎は豊かである。千年藤や、鶴（さつき）

に代表されている、大自然につつまれた文化は、庶民を優れて、勇ましく盛んなものになった。中国道は日本を縦貫する、遙で早い道であり、産業と学問を振興さ

ります。揖保川の水は清く澄み、田園都市山崎は豊かである。千年藤や、鶴（さつき）に代表されている、大自然につつまれた文化は、庶民を優れて、勇ましく盛んなものになった。中国道は日本を縦貫する、遙で早い道であり、産業と学問を振興さ

転結」と申します。この詩の語源にもなっています。

漢詩は平字と仄字を交互に使って、言葉の施律を良くするようを作られていました。各句の最後の文字には、同じ韻の文字を使って響を良くしています。作詞の文

段階から、音律を良くする配慮がなされています。世界最高の文艺といわれる所

以と思います。

詩吟の譜節は、東京(NHK)アセ

ントを基本に、発音の高低を決め、其の上に、詩の抒情に従って、音階を付けます。音符はドミファラシの五段階です。

千数百年前から伝わっている、越天楽や、雅楽の「宮商角徵羽」の五音を洋楽音に

当てはめて譜節を付けています。

以上

将来山崎町を担う幼児のための事業、又素晴らしい伝統的な山崎文化の継承、あるいは自然環境の保存等を我々の活動

の中に取り入れるべく勉強しております。

幸いメンバーは職業もまちまちで考え方もあるバラエティに富んでおり、次々とユニークな事業を展開出来る状態になり、少しでも山崎文化の向上に役立つてゆける事と思っております。

最後になりましたが今後、色々の方々に御指導賜りながら我々の親組織の「新潮会」に負けないような会として頑張つておりますので叱咤激励して下さいます

やす事が無い時期もありましたが、五周年事業を関西学院大学グリークラブを招きコンサートを開催し、我々も團結すれば大きな事業を催す事も可能であると自信を持ってきております。

毎月の例会では講師を招き文化的な勉強をさせて頂いたり、又メンバー間で今後の活動方針を真剣に討論したりしておりますが少しずつ平成会の方向づけが出来つゝあるよう思われる今日この頃です。一番に我々メンバーの文化的教養を身につけねばなりませんが外に向っての活動、何が一般の皆様に喜ばれるのか?

派手な活動でなく地道に永く続けられ又町のためになるような事業を模索しております。

将来山崎町を担う幼児のための事業、又素晴らしい伝統的な山崎文化の継承、あるいは自然環境の保存等を我々の活動

の中に取り入れるべく勉強しております。

幸いメンバーは職業もまちまちで考え方もあるバラエティに富んでおり、次々とユニークな事業を展開出来る状態になり、少しでも山崎文化の向上に役立つてゆける事と思っております。

最後になりましたが今後、色々の方々に御指導賜りながら我々の親組織の「新

潮会」に負けないような会として頑張つ

ておりますので叱咤激励して下さいます

平成会の使命

菅原俊治

平成元年に新潮会の御指導のもとに会

が発足して早くも七年を経過いたしました。

メンバ一数も現在三十名で年令層は三

十代前半から五十代前半と約三十才の巾帼あり会員の融合に努める事に日時を費

山崎町指定文化財天然記念物

「明証寺のイワヒバ群生地」

山崎植物同好会 河本雅視

八月下旬のある日、町指定の文化財、

天然記念物である明証寺のイワヒバ群落を見に行った。役場から千種線を西へ六

kmほど行ったところに塙田に入る道があり、そこからまた二kmばかり車を走らせると、菩提山明証寺がある。山門をくぐり境内の立派な枝ぶりの松を眺めながら

本堂へ進む。その横の庫裏右手の潜り戸を入れていただくと、目の前に山が迫り岩壁が露出している。その広さ二〇〇坪ばかりの岩肌にたくさんのイワヒバ群落を見ることが出来た。ここが山崎町指定文化財の天然記念物イワヒバ（イワマツ）群生地である。

当日は大きく開いたイワヒバを想像して行つたが、あいにく晴天続きであったため、どのイワヒバもにぎりこぶしのように葉を内側に巻き込み、白いだんごの群を見ることになった。しかし考えてみれば植物の環境に適応する知恵を学ぶことが出来たと思う。乾燥から身を守るため、水分の最も蒸散しにくい姿なのである。別の日、雨のあと再度訪れて見せて頂いたが今度は大きく開いたイワヒバを見ることが出来た。

初心にかえつて

山崎茶華道協会

前田惠子

中川住職の話によれば、この寺は四四年の歴史を持つ寺であるが、このイワヒバも昔から生えていたようで、特に八代目の住職が手を入れて守られ、また先代の十五代目の住職のとき岩壁の上方まで樹木が除去され、現在のよう広い群生地になったとの事である。

イワヒバ以外にも近頃見ることが少なくなったツメレンゲもそれらの間に見ることが出来た。ツメレンゲはイワレンゲと同じように蓮華座の上に青いマップックリを細長く引き伸ばしたような形である。これらは岩の上や、わらぶき屋根の上に生える多年草であるが、わらぶき屋根がなくなつた今は見ることも少なくなつたといわれている。

町内には、文化財に指定されている巨木等もたくさんある。大歳神社の千年フジ、八幡神社のモッコク、大倭^{おほひでの}神社や岩上神社の夫婦スギ、これらは県指定の文化財であり、この他町指定の大スギや大シラカシ等の巨木や社叢などたくさんある。これらを見て回ることも自然と親しみ、人生を豊かにすることになると思う。

芝生にまじる花の色々

利休居士が茶道のあり方について教えられた言葉に『四規七則』と言うのがあります。四規とは和敬清寂、七則とは

茶は服のよきように点て、炭は湯のわく

ように置き、冬は暖に、夏は涼しく、花

は野の花のようになけ、刻限は早めに、

降らずとも雨の用意、相客に心せよ、と

言う基礎知識である。又茶道の極致は仏法の修得にある。家居の結構や食事の珍味を楽しみとするのは俗世のことである。

家は雨の洩らない程度、食事は飢えない程度でよい。それで満足し感謝しているのが仏の教えであり、茶湯の本意である。

もともと茶湯は禪僧が仏に仕える行事

程度でよい。それで満足し感謝しているのが仏の教えであり、茶湯の本意である。

もともと茶湯は禪僧が仏に仕える行事

から起つたもので、僧侶が水を運び、薪を取り湯を沸かし、茶をたてて仏に供

へ、人にも施し、私も飲み、花を立て香

をたくといった修行の精神を、一般の人

間生活の上に移し植えたものであると茶道の本義を説明し、利休の茶湯の道歌と

して伝来の確かなものに、

心つけて見ねばこそあれ春の野の

というのがあります。心を澄ませてよく注意して見さえすれば、美はどこにでも発見される。つまり、真理は平凡だ、という歌の心であります。……等、以前に茶道書で読んだ事があります。茶道は一般的の人々に親しまれにくく、実生活からかけ離れた様な感がありますが、ことさら難しく考えないで、多くの人にふれ合はれないと、何事も成り立たないと思います。

教育長時代から昨年度迄の長きに亘つて会長を務めて下さいました庄和夫前会長様が、「稽古と作意」についてのお話ををして下さった事がありました。稽古とは昔のしきたりをそのまま忠実に習う事、又作意とはそれをもとに時と場合に即応し、新しい工夫を凝らす進歩的又創造的な行き方である。この二つを同時に実行する事が利休の教えであるという事など、機会ある毎に茶人に関する種々の教えを御講話下さり、山崎茶華道の発展にはげむ様私達の指針を御指導下さいました。心より深く感謝申し上げております。

日本文化の心を代表する茶華道に携わる者として、常日頃の修練に努め、初心忘れる事なく、奢らず謙虚で、豊かな心で相手の身になつて、和心を大切に、親睦を密にする様、実践にはげみたいと願つています。

子どもの頃から、見様見真似で将棋を

始めて六十年近くなります。最初のうち
は、ただ遊び半分でしたが、対局数を重
ねる毎に、その奥行きの深さに魅せられ
ていきました。殆ど独学で、自分より強
い相手との実践を通して、力をつけていっ
たように記憶しています。特に負けた後
は将棋の本を手当たり次第に読み、何とか
次回は相手を打ち負かしてやろうと密か
に作戦を練ったのです。

現在は、詰め将棋の

本や新聞の記事を読む
程度ですが、最近、将
棋に関する二つの事が
心に残っています。そ
の一つは、囲碁と将棋
のハンディキャップを
比較した内容の新聞記
事です。「実力の違う相手と対戦する時、
囲碁は弱い方が何目か置くが、将棋は強
い方が駒を落とすので、そのハンディの
つけ方が面白くない……。」と書いてあ
りました。さらに、「落とした駒を相手
に渡すとか歩のいくつかをと金にすると
か、新しいハンディのつけ方を考えたら
どうであろう……。」と結んであります
た。

それで、将棋のハンディを確認してみる
と、一級差の場合は先手と後手、二級差
は香落ち、三級差は角落ち……のように



将棋の魅力

山崎将棋同好会

三宅 宏佳

本や新聞の記事を読む

程度ですが、最近、将
棋に関する二つの事が
心に残っています。そ
の一つは、囲碁と将棋
のハンディキャップを
比較した内容の新聞記
事です。「実力の違う相手と対戦する時、
囲碁は弱い方が何目か置くが、将棋は強
い方が駒を落とすので、そのハンディの
つけ方が面白くない……。」と書いてあ
りました。さらに、「落とした駒を相手
に渡すとか歩のいくつかをと金にすると
か、新しいハンディのつけ方を考えたら
どうであろう……。」と結んであります
た。

そこで、将棋のハンディを確認してみる
と、一級差の場合は先手と後手、二級差
は香落ち、三級差は角落ち……のように

の目標は、羽生善治名人
だそうです。彼も、将棋
の持つ魅力を知った一人

いていました。彼の将来
の目標は、羽生善治名人
だそうです。彼も、将棋
の持つ魅力を知った一人

レンジセミナーで出会ったのですが、
『ぼくは、好きな将棋を通じて友達が沢
山できました。大人の人とも将棋の試合
をして、大変勉強になりました。』と書

目安が決まっています。確かに、囲碁の
ように一目ずつ細かくハンディを刻むこ
とはできませんが、逆に、そこが将棋の
持つ魅力なのではないかと思いました。
二つ目は、私がよく知っている小学生
が書いた作文です。その小学生とはチャ
ンスで、大人の人とも将棋の試合
をして、大変勉強になりました。

秋祭りに奉納

都多獅子舞保存会
福 本 淳

氏子が、十月十日の秋祭りに桓武伊和神
社に集まり地域の子供会、消防団、婦
人会、老人会、自治会役員そして神社総
代と大勢の人達が見守る中での獅子舞奉
納であります。

この都多獅子舞保存会は、桓武伊和神
社秋祭りに奉納されている獅子舞を郷土
芸能として保存し、後世に継承すること
を目的にして昭和五十八年九月に結成さ
れ、以後十三年間毎年六種類の獅子舞を
奉納しています。

まず、子供会による太鼓、笛、拍子木
に合わせて二種類のかわいい子供獅子、
大人によるダイナミックな獅子舞という
ように、見ている人達から拍手と感嘆の
声が聞こえ、この時世話をしている者と
しての感動と喜びは何ともいえません。
八月下旬から毎週三・四回の練習を行
い十月十日の獅子舞奉納までの間、会員
各自が自分達の役割を考えながら活動し

ています。

このように郷土芸能保存意欲の表れが、
毎年、奉納時に沢山の観客があり絶賛を
得ているものと思います。

今後、都多獅子舞を後世に伝え、継承
させていくために一人でも多くの参加を
希望し、毎年活動を続け地域の活性化の
一助となるよう都多獅子舞保存会員一同
頑張っていきたいと思っています。



舞ごよみ

さつき民踊グループ

丸山幸子

徒然なるままに、舞ごよみなどを……。手の動き、顔の動き、目の移動、顎の動きにも美しい切れ味を表わし、手先はなんとお人形のごとく。

この美しい舞は我が岸本幸子先生。その姿の麗しさ、艶やかさは見る人達を夢の心地に酔わせます。

こんなすばらしい先生に、小学生の娘二人と母親とが魅了され、おかげで参ります。唯一の親子の時間でもあります。先生の振りを見逃すまいとそれは皆さんが全員が真剣な眼差し。

か、素早く舞の動きとなっていましたが、大人のほうは身体もセンスも固く、そう簡単には間屋が卸してくれません。四苦八苦しながらも、みんなの心に潤いをもたらしてくれます。

山崎町の芸能祭・敬老会・老人福祉センター・長水園・白寿園等に参加させて頂いて、心より嬉しく思います。

拍子木の響きに一心に耳を傾け、揃いの衣装で背筋と心がピーンと張り、無事

踊り終えた時、喜びと安堵感が漂い、大きな充実感にあふれます。

むつみ園、まどか園にも慰問させて頂き、ボランティアの心を大切にと痛感致します。

生涯をボランティアに捧げた「マザー・テレサ」の尊い愛の生涯はあまりにも有名です。ノーベル平和賞受賞の彼女を思う時、ボランティア精神の理念として、社会に対する無償の奉仕が何よりも大切なものと強く心に思います。

今年の五月に、山崎舞の会一行は、姉妹提携アメリカ合衆国ワシントン州スクイム市へ旅立ちました。「百聞は一見に如かず」……。灌漑用水フェスティバルパレード、プレスピテリアン教会、中学校、高校、メソジスト教会において、人間の生活に深く結びついて生まれ歌いつがれてきた民謡を披露させて頂くことが出来ました。

スクイムの雄大な自然、心の温かい思いやりの人々にふれ、文化は違えども、人間の心は同じで一つであることを自分の目で掴み、深い感動と至福の時に感謝で一杯になりました。

日本が生み出した世界に誇る舞いを大切にして、郷土に深く根ざし長い間歌い継がれてきた民謡が、毎日の生活に潤いを与え、豊かな心にしてくれることをいきたいと願います。

現在地球上の人類すべてが、生まれた時からやきものと共に生活しているようなものであり、人間の生活の中で、衣食住に次いで、欠かせないのが、やきものである。日常の生活になにげなく必需品として使用されている食器類、器に花木を活け花の美を楽しみ、心に安らぎと生활に潤いを与えてくれるのが、やきものである。人間と土と炎の関わりは、有史以前に始まり、何千年的昔の人達が、偶然にも火を燃やした場所の下の土が焼けて固くなると言うことを発見し、土で形容を造り、火で焼締め、日常煮炊きに使用する器を製造する事を覚え、生活必需品としてのやきものの始まりである。中国から朝韓をへてより進んだ技術が入ってきたのが、須恵器で出来たのが、須恵器でありである。窯の構造が、より進歩し、焼成温度も一変して、千百度以上

古代人の土と炎の藝術

山崎美術協会

藤井山陽

これまで、縄文と言う文字が表わすように、器物の表面上に繩で押された紋様が施されたり、線彫りで表面を飾り美の表現をしたものなど様々で、自由奔放の美がしばらくして、このころから土と炎の藝術が始まったのである。この時代には窯はなく、露天で焼かれていた。所謂野燒焼成と言ったのである。この時代には窯はなく、時代にかけて、瀬戸、常滑、信楽、丹波、六古窯と言った。中国から茶が渡来し、茶の湯が起り、日本独特の茶陶器の始まりである。その名碗で茶を一眼、閑座聽松風、このひとときが、心身共に安らぐ

の技術は現在にも通じ、我々が学ぶ事大である。日本のやきものはさらに進歩し、新しく展開を始め、弥生式に並行して発達したのが、土師器である。

私達の祖先は、死後に後生を願った仏教の信仰から土に還って行く人々のため、その魂の慰めと後生の生活を信じて、より安樂であるように、永遠に保存ができるやきものを埋葬の際副葬品として心をこめて死者の靈に贈った。このころから古墳時代の初期に入っていくのである。中国から朝韓をへてより進んだ技術が入ってきたのが、須恵器で出来たのが、須恵器でありである。窯の構造が、より進歩し、焼成温度も一変して、千百度以上

回顧

塚田栄一

太平洋戦争は、多くの尊い命を奪い、国内の各都市は焦土と化した。

その傷跡は体験者の心に深く刻まれてゐるが、一方で時代の流れは、戦争を記憶の外に押しやうとする『戦後五十年』二度とあってはならない戦争の悲惨さを風化させてはならないと強く感じる。新潮会員のほとんどは大正生まれで戦争体験者。中にはシベリア抑留者であった方も数名ある。

ソ連は、終戦間近になって条約を一方的に破棄し、突然の参戦で、戦勝国になつた。

ソ連の首相スターリンの思い一つで決まつたシベリア抑留。復興に捕虜の労働力を使う考へが、スターリンの頭の中にあつたという。その数約五十七万人。内五万五千余人が帰国を果せないまま亡くなつた。

亡くなられた方々の無念さを思つて目頭が熱くなるばかりだ。

このような残酷なことがあつてはならない。そのためにも戦争の実態を語り継がねばならないと思う。



シベリア抑留引揚船の舞鶴港で新潮会員旅行

★記念文化講演会

朝日新聞論説委員

(天声人語)

荒垣秀雄先生

女流随筆家俳人

中村汀女士生

リズム写真芸術

銳才 土門 拳先生

会は研修と親睦を深め、地域文化の向上発展に寄与し、平和への一層の努力を続けたい。

「一口吸尽」と云う言葉も、それを解く鍵を懷に、何處に鍵穴があるのかと、毎日向うの山を見詰めました。思い切り、

或る日、対人関係で、悲しく、腹に据えかねる事に出会いまして、矢張り、山に向かって、大きく腹一杯、それを吸い込みました。所がどうでしょう、昨夜まで胸一杯に詰まっていたもや／＼が、息と一緒にすかっと抜け落ちて、一遍に体中が爽やかに空っぽになりました。「そ

うだ、＼＼と嬉しくなり、つまらない事にこだわっていた目が開きました。そ

うしたら山の木立ちも岩も、全部仏様に見えるようになりました。不思議にも、

見えた。お茶もお茶碗も同じです。

世の人達が皆「他人も自分も仏様だ」と悟る事が出来たなら、戦争はおろか、

全ての争い事がなく、どんなに仕合せな事でございましょう。

一口吸尽

山崎茶道研修会

柴山玉子
(宗玉)

禅を説く言葉の中に「一口吸尽」と

いう一言があります。我家の老僧が、こ

れをよく色紙に書いたりしています。そ

の意味はと尋ねますと、「西江の水を一

口に飲んでみよ」とか、「目前に高く横たわる山を一口に吸い込んでみよ」と申します。これは公案と云つて、禅の修行の課題だそうです。

私は禅寺の寺庭婦人でありますので、

日々、寺の行事に来寺される布教師様方の法語の中から、自分に納得の出来るお

話を聞き取りたいと、五十年の歳月、耳を傾けて來ました。又、本を読んだり、

寺町の旧旭座で千人以上の入場で、

「二階が落ちないか」と心配するほど。

★「潜行三千里」の著者

元陸軍参謀

辻 正信氏

新潮会は、戦後の混乱がおちついた、昭和二十七年結成され、以来四十三年の歳月が経過した。その間いろんな文化事業をやって来たが、特に盛会だった講演会は次の二つ。

耳に聞き心に思い身に修せば

いつか菩提に入相の鐘

謡曲同好会だより

山崎町謡曲同好会 伊野操治

隔年毎に行われる八幡神社新能も今年で第九回目を迎える。去る九月二日(土)に小雨を案じる中で開催された。

前回の準備に引き続き、同好会員一同

(百十五名) 参加のうち午後三時より開演「一部」会員(九社)による番組が、つき／＼披露された。

初秋の夜も夕暮と成る頃には、「二部」の開演、八幡神社宮司による「修祓の儀」、奉贊会長「舞台改め」の後、能楽、観世流「吉野天神」シテ坂口信男師、ワキ江崎金治郎師で演じられ、すっかり暗くなつた頃、古式に則り神秘的に火入れ式が行われ、続いて狂言「蝸牛」を善竹忠重師が演じられた。

また、掉尾では能楽、観世流「野守」シテ波多野晋師、ワキ中村彌三郎師により披露され、初秋の夜はいつしか靈巖の中に浸り、観客推定千人とも数えられ、すっかり感銘させられた。



[写真は、能楽「野守」の一場面]

菊花囲碁 大会に思う

山崎町同好会

松本明



十一月三日菊花開幕大会が、老人福祉センターに於て開催された。参加者は約四十名であった。

山崎町同好会主催で、さつき祭りと菊花展に協賛して毎年開催されるようになつて、今回で三十四年を経ている。

郡内の碁会も、四百年に余る歴史があると云われています。明治後半からの、記録によると、開幕番付の作製記念とか、支部創立記念や、愛好者の、還暦、米寿、白寿等の祝賀追善等々、会場も、公会堂、寺院、学校講堂、農協会館、下村記念館、文化会館、福祉センター等と移り変わつてゐる。主催も、祝賀追善のそれぞれの友人、又何々支部とか、何々会等と種々である。そして最近では、県とか町の後援等も多くなつてゐる。又参加者も、私の知つてゐる古き時代では、百人を越す位が普通であった。

これらの永い年月の中で、社会の環境も、娯楽の種類もそれらに対する考え方も大きく変わって参りました。

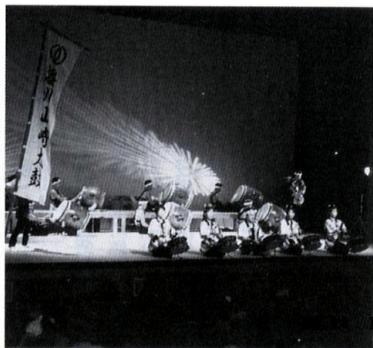


昔は、碁は道楽者のすることだとか、親の死に目にもあえぬとか、少々日陰者の見方をされたところもあったようですが、今では新聞社、放送局、大事業所、会社、町、県等の公的な支援、後援も受けられる開かれた、日の当たる文化の一部を担う、そして老後の余生を楽しくする大衆の娯楽となつています。

惜しむらくは、今では若い人達の参加が、激減していることです。将来のこと、老後のことを考えると、多くの老若男女にもっと興味を持つてほしいと願うものです。

輝かしい播州山崎太鼓

播州山崎太鼓 久保孝



第16回春の芸能祭

いつもありがとうございます。皆様には暖かい御支援を頂き、メンバー一同、日々練習に励んでおります。山崎太鼓を始めたのは二年前になります。山崎に若者の太鼓を作りたいと今のリーダーの伊達達也君に話をすると、二つ返事で引き受けられました。与太呂の二階に、稻田印刷の常実君、アボシア玩具店の神吉正男君、トクサヤ文具の志水昭彦君、山崎小学校の朱山修先生、町役場の寺西康雄氏、みのり保育園の森下昌君、労音設上田馨君、与太呂の長田進氏が集つて播州山崎太鼓のスタートをきりました。今では賛助会も出来て、御協力を頂いております。週二回(マルタニさん)の防音設



95年秋のふれあい文化祭

合唱団は、これまで青少年団体の仲間であります。ボーカスカウトやリトルリーグなど野外活動やスポーツ活動を中心とするグループですから、室内で歌の練習をしている私達とは、全体行動などで他団体にも迷惑をかけておりましたので恐るべく協会への入会をお伺いいたしました所お許し頂いた次第です。

山崎児童合唱団は、発團して十八年になります。その当時山崎町や郡内各地の備の部屋をお借りして、打てば心に響く音を出せる様に、太鼓に向かい床が抜けろくら打ちこんでおります。今年からは山崎町創作太鼓に取り組みたいと思っておりますので、皆様にも御協力お願い致します。現在は、姫路のシャチの会の姫山太鼓・太鼓ばやし・屋台ばやし等をマスターしたところです。これからは若者から少年に太鼓の心を伝え、又、すばらしい人間国宝を山崎太鼓から出すくらいの気持ちで取り組みたいと思っております。つきましては、メンバーに入りました。冬は寒く夏は暑く照明音響の設備

TEL 六二一八六五四
事務局

第一回初回式をめざし、譜の読めない児童達に半年間特訓、その終りには須賀の願寿寺に三泊四日の合宿をして、発表会を迎えた。発表会場は、旧山小講堂です。今思うと懐かしい木の講堂です。ステージは階段で閉まれ、中央に奉安殿が残っていたオールドスタイルの講堂でした。冬は寒く夏は暑く照明音響の設備

初めてまして山崎児童合唱団でーす!!

山崎児童合唱団 藤井慧乘



神戸市東灘区の被災地に於ける慰問コンサート

明・音響と天井まで上り這い廻りました。今全体的に古い物を大事にしようという運動が起っています。欧米では古いものが大切に保存されています。文化発表、研修会場が不足している今日、実に大切なものを無くして残念だと思います。

さて児童合唱団は、其後西日本連盟に加盟して西日本各市で発表したり、京都西本願寺の全国大会に招待されたり、昨年春には、神戸東灘の被災地で慰問のオペレッタを上演したり活動を展開して参りました。これからも夢は益々大きく、発團二十周年をめざして「…………」の計画を考えております。協会の皆さま、かわいい孫が出来たと思って頂き御支援の程よろしくお願ひ申し上げます。

事務局便り

編集後記

編集長 荒木俊介

◆郷土の自然を描いた油彩画を寄贈
山崎町文化協会と同町郷土振興会が協力。このほど同町内の「山」を描いた油彩画三点を同町役場、山崎文化会館、西兵庫信用金庫へ贈った。油彩画は山崎美術協会の福岡久藏会長が制作した六号の作品。町中心部の景勝、最上山、河東地区の中山、兵庫県が開発を予定している城下地区的国見山を描いたもの。町の人たちに、これらの作品を見てもらうこと

によって郷土の豊かな自然や美しさを再認識していただこうというのがねらい。

両会は今後も協力。毎年、油彩画の寄贈を続ける計画。

◆山崎植物同好会が「くすのき賞」受賞

山崎植物同好会(久宗丑雄会長)が兵庫県の「くすのき賞」を受賞。このほど赤穂市文化会館で開かれた「こころ豊かな西播磨」をめざす運動推進大会の席上、表彰された。同会は昭和六十一年五月に結成。それ以来、八十八回の自然観察会を催しているほか、中学生を対象に揖保川の水生生物調査や子供たちの採集した植物と昆虫の判定会を開くなどの活動を続けている。現在の会員は九十人。

◆姫路市内の文化施設を見学研修

見学研修には山崎美術協会の会員ら二十二人が参加。姫路文学館、同美術館、書写の里美術工芸館など巡回して見学研修をした。

春寒じロマンの夢のなを短か
今回も各文化団体から素晴らしい随想や貴重なお便りなどお寄せ頂き、機関誌としての紙面を充実させて頂きましたことに對しまして心より厚く御礼申し上げます。

本号には浅田耕三氏の小説を掲載しました。今昔織り交ぜながら、いつの世にも変わらぬ夫婦、男女の間の愛の機微が軽妙なタッチで描かれています。

特別寄稿のエッセイには中嶋彰氏と山中昭夫氏のお二人にお願いしました。いずれも興味深い内容となっております。殊に山中先生の共同研究者である中前教授が山崎高校出身の同郷であった事が後で分かるなど、先生の研究の素晴らしさは勿論ですが、人の世の縁の不思議さに驚かされます。表紙並びに挿絵は再び福岡先生にお願いしました。黒歴先生には二年間ご苦労様でした。誌上を借りて厚く御礼申し上げます。

（略）

OA機器・事務用品・スチール家具
学校設備品・理化学機器・楽器

イトーオフィスサービス 株式会社

(旧社名 伊藤文具)

代表取締役 伊藤和久

山崎町中央商店街 TEL(0790)62-0126

創業明治28年・さつき本舗

四季の菓子

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を



御菓子司 さつき

本店：播州山崎町さつき通り
山田店：播州山崎町山田
福崎店：播州福崎町辻川

(電) 0790-62-0170
(電) 0790-62-0160
(電) 0790-22-7555



飛石機械産業からのお願い

人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」を生活信条に、自作自演で30数年を歩いて参りました。昭和46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、人としての使命感に燃え、それを無限のエネルギーとして全社揚げて取組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければと申し上げており、流通の世界の中で生活文化の向上を願い、多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

TOBIISHI

飛石機械産業株式会社

TOBIISHI KIKAI SANGYO CO.,LTD.

TEL(0790)62-1700

飛石連絡 desk

飛石販売・クリエイティブ desk

トビイ・販賣 desk

トビイ・クリエイティブ desk

クリエイティブ desk

for happy day happy life

飛石連絡 desk

飛石販賣・クリエイティブ desk

トビイ・販賣 desk

トビイ・クリエイティブ desk

クリエイティブ desk

飛石連絡 desk

飛石販賣・クリエイティブ desk

トビイ・販賣 desk

トビイ・クリエイティブ desk

クリエイティブ desk

◆最新型カラー現像機導入◆

カラープリント・スピード仕上げ
良い品を・安く・安心して買える店



アアアカメラ

Specialty Camera Shop
宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 本店 TEL(0790)62-2089
咲ランド店 TEL(0790)63-0533

料理旅館・割烹

創業
文久元年

菊水

兵庫県宍粟郡山崎町山崎287

TEL (0790) 62-1119(代)

寿

幸せへの旅立ちに――。

ふじむら貸衣裳

宍粟郡山崎町山崎181

本店 TEL(0790) 62-0052

咲ランド店 TEL(0790) 63-0565

—Guide To Multimedia—

NEC

兵庫日本電気株式会社

本 社／兵庫県宍粟郡山崎町須賀沢231番地

TEL (0790) 62-1222

姫路営業所／姫路市南畠町2-1(安田火災姫路ビル8F)

TEL (0792) 22-0111

くらしのメッセージいろいろ……

- 大切な年金、給与振込は**にじしん**の自動受取で**あんしん**。
- 素敵なお暮らしのお手伝い**にじしん**個人ローンでお気軽にどうぞ。

豊かな街づくりをお手伝いする



西兵庫信用金庫

TEL 0790-62-2020(代)

本
醸
造

龍
神

清酒

山
陽

確
か
な
品
質

純
米
酒

さ
ー
一
献
き



山陽盃酒造(株) TEL (0790) 62-1010(代)

安全で快適な生活をお届けする

JOMO 株式会社 ジャパンエナジー 特約店

V ホンジヨウ

本社 兵庫県宍粟郡山崎町中井96 TEL (0790) 63-1234(代)
(0790) 62-4321(代)